高松市埋蔵文化財調査報告　第155集

産直「フルーツの里」新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

佐　料　遺　跡

2014年3月

香川県農業協同組合
高松市教育委員会

佐料遺跡出土土器群

例　　言

1　本書は，産直「フルーツの里」新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で，佐料遺跡にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本報告書の執筆は，波多野篤が第１章，第３章第１・２・３節と第４節の遺構を，渡邊誠がその他を執筆し，編集は渡邊が行った。

3　本報告の標高は東京湾平均海面高度を基準とし，方位は座標北を示す。

4　出土遺物の実測図は，土器・土製品は１/４，石器は１/２，遺構の縮尺は 1/40・1/60 を原則とした。

5　本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
SK：土坑　　SX：性格不明遺構　　SP：柱穴　　SD：溝　　NR：自然流路

6　発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

7　発掘調査から整理作業，報告書執筆を実施するにあたって，下記の方々および関係諸機関から御協力と御教示を得た。記して厚く謝意を表する（五十音順，敬称略）。
今岡 重夫，乗松 真也，香川県教育委員会

目　　次

第１章　調査の経緯と経過……1
第２章　地理的・歴史的環境……3
第３章　調査の成果……7
第４章　まとめ……33

挿　図　目　次

第１図　調査区配置図……2
第２図　高松市における位置図……4
第３図　周辺遺跡分布図……5
第４図　調査区土層図……8
第５図　遺構配置図……9
第６図　遺構変遷図……11
第７図　第Ⅰ期遺構平面図……12
第８図　NR1・SD2 土層断面図……13
第９図　SD2・NR1 出土遺物……15
第 10 図　第Ⅱ期遺構平面図……17
第 11 図　SD1 平面図・土層断面図……18
第 12 図　SD1 出土遺物①……20
第 13 図　SD1 出土遺物②……21
第 14 図　SD1 出土遺物③……23
第 15 図　溝平・断面図①……25
第 16 図　溝平・断面図②……27
第 17 図　土坑・性格不明遺構・ピット平・断面図……29
第 18 図　SD10・16，SX1，SP5 出土遺物……31
第 19 図　その他の遺物……32
第 20 図　出土土器胎土分類別比率……33

挿　表　目　次

第１表　整理作業工程表……3
第２表　遺跡一覧表……5
第３表　遺構一覧表……10
第４表　出土土器胎土分類別個体数……33

写　真　図　版　目　次

写真図版 1-1　２トレンチ全景（北から）
写真図版 1-2　５トレンチ全景（東から）
写真図版 1-3　６トレンチ全景（西から）
写真図版 1-4　７トレンチ全景（東から）
写真図版 2-1　９トレンチ全景（北から）
写真図版 2-2　10 トレンチ全景（北から）
写真図版 2-3　基本土層 A 断面（西から）
写真図版 2-4　基本土層 B 断面（西から）
写真図版 2-5　基本土層 C 断面（西から）
写真図版 3-1　SD2 検出全景（北から）
写真図版 3-2　SD2 断面①（東から）
写真図版 3-3　SD2 断面②（南から）
写真図版 3-4　NR1 1 トレンチ断ち割り断面（西から）
写真図版 3-5　NR1 10 トレンチ断面（北から）
写真図版 3-6　SD1 全景（北から）
写真図版 4-1　SD1 上層土器出土状況（東から）
写真図版 4-2　SD1 上層土器出土状況（南から）
写真図版 4-3　SD1 上層土器出土状況（南から）
写真図版 5-1　SD1a 土層（南から）
写真図版 5-2　SD1b 土層（南から）
写真図版 5-3　SD1c 土層（南から）
写真図版 5-4　SD4 全景（南から）
写真図版 5-5　SD4 断面（南から）
写真図版 5-6　２トレンチ南半溝全景（南から）
写真図版 5-7　SD5・6 断面（北西から）
写真図版 5-8　SD7 ～ 9 断面（東から）
写真図版 6-1　SD14 全景（西から）
写真図版 6-2　SD14 断面（北東から）
写真図版 6-3　SD15 全景（３トレンチ：南から）
写真図版 6-4　SD15 断面（５トレンチ：南から）
写真図版 6-5　SD16 全景（西から）
写真図版 6-6　SD16 断面（南から）
写真図版 6-7　SD19 断面（南東から）
写真図版 7-1　SX1 土器出土状況（南から）
写真図版 7-2　SX1 土器出土状況（南から）
写真図版 7-3　SX1 完掘状況（南東から）
写真図版 8-1　SP5 全景（西から）
写真図版 8-2　SP5 土器出土状況（南から）
写真図版 8-3　SP5 土器出土状況（南から）

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯と経過

a. 経緯と経過

平成 22 年度に高松市鬼無町佐料 20 番地 1 において事業が計画され，事業者等から本市教育委員会（以下，市教委）に対して包蔵地照会があった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「佐料遺跡」の範囲内であるが，埋蔵文化財の包蔵状況が不明であったため，確認調査実施についての協議を事業者等と本市教委で行った。協議後，事業者の依頼に基づき，市教委が平成 23 年 3 月 22・23 日の実働 2 日で確認調査を実施することとなった。確認調査の結果，当該地に遺構・遺物が認められたことから，調査後に市教委は事業者等に対して，当該地において保護層を確保できない工事掘削を行う場合は，事前に埋蔵文化財に対する保護措置が必要である点を伝えた。

その後，平成 25 年 1 月に，当該地において事業を計画している旨の報告が土地所有者でかつ今回の事業の事業者にあたる香川県農業協同組合(以下,農協)からあり，当該地の文化財保護に対する協議の依頼が市教委にあった。協議内容は，①現時点での工事計画，②発掘調査事業の内容，③費用負担，④発掘調査を実施した場合の工程，以上についてで，これらについて数度にわたって双方で協議を進めた。その間，当該地で工事が実施されることが確定したため，事業者から平成 25 年 3 月 19 日付けで文化財保護法第 93 条第 1 項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が市教委に提出された。その届出を市教委から香川県教育委員会（以下,県教委）に進達したところ，同日付けで県教委より工事着工前に発掘調査を実施する旨の指導があった。

県教委からの指導を受けて，発掘調査の実施に向けて再度事業者と市教委は協議を重ね，費用面などの合意が形成されたため，同年 4 月 19 日付けで事業者と高松市および市教委の 3 者で協定を締結し，「産直「フルーツの里」新築工事に伴う埋蔵文化財調査管理業務」として，埋蔵文化財の発掘調査を実施することとなった。

なお，協定書締結前になるが，事業者の意向で発掘調査全般を業者委託とすることとなり，同年 4 月 11 日付けで事業者と事業者が選定した委託業者である株式会社村上組の双方で埋蔵文化財発掘調査業務に係る契約が交わされた。

調査の概要は次のとおりである。

対象面積　273㎡
調査担当　高松市教育委員会
調査原因　産直「フルーツの里」新築工事
調査期間　平成 25 年 4 月 22 月～ 5 月 17 日

b. 本工事における埋蔵文化財の保護措置

平成 23 年 3 月に実施した確認調査の成果から判明しているのは，現状地盤から最も浅い部分で約 0.4 mの深さに遺物包含層が堆積している点である。遺物包含層上面から 30㎝の保護層を確保できない工事掘削は，当該工事の場合は基礎と梁の設置工事であり，工事での余掘りの範囲も考慮して第 1 図のとおり調査区を設定した。なお,調査期間中に事業者からロードマップ設置箇所（8 トレンチ)も発掘調査を実施して欲しいとの要望があり，委託業者の了解も得られたことから合わせて発掘調査を行った。以上のとおり行った発掘調査の合計面積は，約 273㎡である。

第２節　発掘調査の経過（調査日誌抄）

発掘調査は，平成 25 年 4 月 22 日の重機掘削から開始した。その後，遺構等の調査を進め，同年 5 月 17 日に調査区の埋め戻しと調査道具の撤収を終え，現地調査がすべて完了した。調査期間は，実働で 15 日である。

今回の調査は各調査区のすぐ横に排土置場を確保できたため，重機の侵入路を確保しながら幅の広い 1・2 ト

写真１　鬼無小学校による現場見学の様子

第1図　調査区配置図（1/2,000）

レンチの重機掘削・遺構掘削から開始した。また，重機掘削の都合で，調査が完了したトレンチについては先行して埋め戻しを行った。なお，各調査区のトレンチ番号は重機掘削を行った順に付したが，一部，整理期間中にトレンチ名の修正を1箇所のみ行った（11トレンチ→8トレンチ）。調査の詳細な経過については，下記の調査日誌抄を参照されたい。

調査日誌抄（平成25年4月22日～同年5月17日）

4月22日（月）　本日より調査を開始。1・2トレンチの重機掘削を行う。溝やピットなどの遺構を検出。

4月23日（火）　1トレンチの遺構検出を行う。溝などの遺構を検出。

4月25日(木)　1トレンチのSD1の調査を中心に行う。SD1から多くの遺物が出土。

4月26日（金）　昨日に引き続きSD1の調査を行う。本日も多量の遺物が出土。香川県農業協同組合副理事長をはじめ約20名が来訪。

5月1日（水）　SD1の掘削を進め，並行して遺物の出土状況の図化作業を行う。鬼無小学校6年生と引率者合計51名が来訪。調査状況の説明を行う。

5月2日（木）　SD1の掘削を行う。また，SD2の掘削および図化作業を並行して行う。

５月７日（火）　SD1・３の掘削・図化作業を行う。

５月８日（水）　本日より調査員３名体制で調査を行う。SD1・３・４の掘削・図化作業を行う。

５月９日（木）　作業の都合から２トレンチは地山面まで重機掘削を行っていなかったため，地山面までの重機掘削を行う。地山面の上位に堆積する土層から遺物が出土。そのほか，SD1・４の掘削と一部遺構の写真撮影を行う。

５月 10 日（金）　次の調査区の重機掘削を行うため，１トレンチの調査完了後に先に埋め戻しを行うこととした。そのため，まだ調査を実施していない遺構の基盤となるSD2とNR１の調査を行う。調査にあたっては，工事の掘削深度で保護層が確保できない建物基礎の部分のみ掘削を行った。双方とも遺物量が少なくかつ土量が多いため，重機にて掘削を行う。本日で，SD2とNR１の掘削・記録作成がすべて完了したため，調査後に１トレンチの埋め戻しを行う。

５月 13 日（月）　３～６・９トレンチの重機掘削と遺構掘削を行い，完掘できた４トレンチの写真撮影を行う。並行して２トレンチの遺構検出・掘削を進める。

５月 14 日（火）　２・３・５・６・９トレンチの遺構掘削を行う。完掘できた調査区は個別に全景写真の撮影を行う。

５月 15 日（水）　２トレンチの遺構掘削を進める。

５月 16 日（木）　２トレンチの遺構掘削・記録作成が完了。追加で調査することとなった８トレンチの重機掘削を行う。道路に隣接した位置であることと遺構が保護できることから，工事の掘削深度＋ 30㎝の深度で重機掘削を終える。工事の掘削では遺構面まで到達しないことを確認。記録作成を行い調査完了。そのまま８トレンチの埋め戻しを行う。

５月 17 日（金）　調査区の埋め戻しと道具の撤収作業を行う。本日で現地調査はすべて完了。

第３節　整理作業の経過

平成 25 年６月から平成 26 年２月に実施し，詳細は下記のとおりである。なお，遺物写真撮影は西大寺フォトに委託して実施した。

第１表　整理作業工程表

	6	7	8	9	10	11	12	H26.1	2
洗浄・接合	■								
選　　別	■								
実　　測		■	■	■	■				
ト レ ー ス					■	■	■	■	
執筆・編集								■	■

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

佐料遺跡は高松市の中心街の西，五色台山地と石清尾山山塊に挟まれた東西約２㎞の沖積平野の西側に位置する。遺跡が所在する鬼無地区は，勝賀山から本津川に囲まれた範囲に展開し，勝賀山から延びる丘陵の裾部に広がる扇状地と本津川によって形成された沖積平野との境界付近に立地し，標高は約 10m である。

東西の山塊は花崗岩塊の頂部に浸食を受けにくい安山岩が分布しメサ地形を形成している。勝賀山の東麓は傾斜面が発達しており，いくつかの丘陵がある。開析谷の発達は顕著ではないが，その丘陵に挟まれた間には，中腹から山麓部にかけて小規模な谷があり，それを利用したため池が点在する。遺跡が立地する扇状地はこれらの谷川が運搬した砂礫によって形成されている。当遺跡の東側には本津川が北流しており，それに平行して袋山東南麓の衣掛付近から北東方向へと至る比高差１ｍほどの段丘崖の東部の低地は本津川の氾濫原である。洪積台地が局所的に認められ，旧石器の出土もそれを裏付けている。

第２節　歴史的環境

【旧石器時代～縄文時代】

香西南西打遺跡で数十点の旧石器が出土し，原産地近くでの石材利用の状況を確認できる。西打遺跡では旧河道からではあるが，縄文時代早期の異形局部磨製石器，前期末（里木Ⅰ式）の縄文土器，石匙などの石器類がまとまって出土している。鬼無藤井遺跡，香西南西打遺跡では自然河川から晩期の精製・粗製浅鉢等が出土している。本遺跡でも深鉢が出土している。明確な遺構はいまだ確認されていないが，古くから人々の活動の場となっていたことは明らかである。

【弥生時代】

縄文時代晩期から引き続き集落の形成が認められ，鬼無藤井遺跡で前期中頃の二重の環濠の中に居住域が確認でき，香西南西打遺跡や西打遺跡でも前期の土器がまとまって旧河道等から出土している。中期は不明であるが，香西南西打遺跡で後葉段階の遺物が出土している。また，佐料遺跡は弥生時代後期中葉から後葉にかけての集落で，標高のやや高い場所に集落が営まれている。

藤尾城跡では特殊器台が出土しており，遺構は確認されていないが，海に面した高所の土地利用のあり方，高

松平野の弥生社会の構造を考える上で非常に興味深い資料である。

【古墳時代～古代】

東方の石清尾山山塊の山頂を利用した積石塚群が前期を通じて築造される。その中でも，立地から古墳群中最大規模の猫塚と当該地域との関係が注目される。石清尾山古墳群の衰退後，中期初頭には勝賀山から南東に延びる丘陵先端部に全長 71.7 mの前方後円墳の今岡古墳が築造される。今岡古墳では平野南部に位置する中間・西井坪遺跡で製作された埴輪や陶棺が使用されているほか，仿製一仙五獣鏡などが出土している。このほかに香東川と本津川に囲まれた沖積平野を中心に相作牛塚をはじめとする古墳が後期にかけて築造されたようであるが，多くは滅失している。

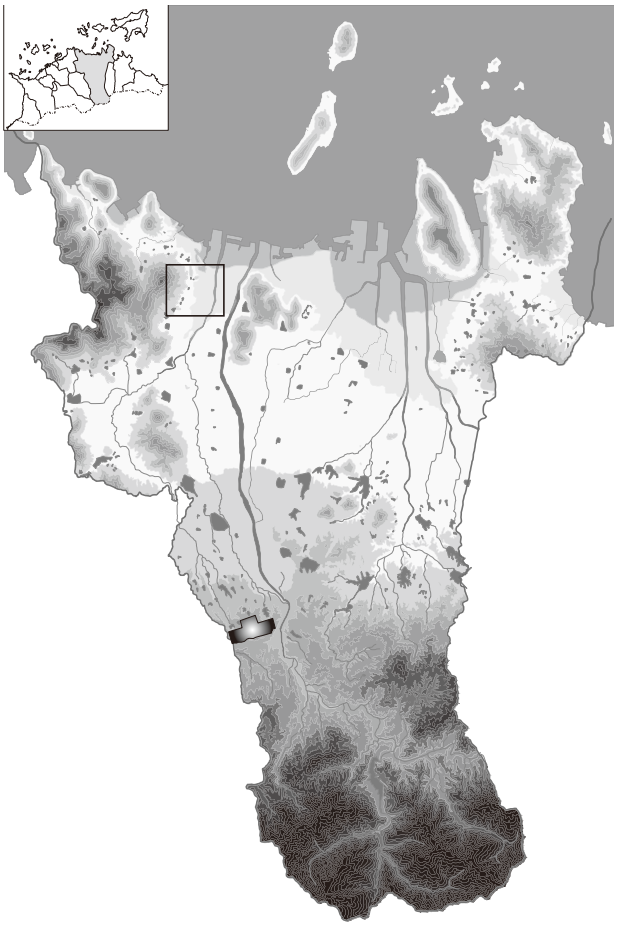
また，後期には，佐料遺跡の立地する谷筋の南に位置するもっとも大きな谷筋に大型の横穴式石室をもつ神高古墳群が７世紀の前半を中心に比較的短い時間の中で集中して築かれる。高松平野東部に所在する久本古墳等と対峙する規模で高松平野における古墳時代後期を考える上で重要な地域である。また，これらの古墳は８世紀初頭頃に再利用されており，被葬者との関係を再確認するような作業がこの頃に行われた可能性が想定され，律令体制の成立前後に自らの系譜関係の確認の必要性が生じたものと考えられている。

このほかに浄願寺山山頂にも群集墳が築かれるなど，当該地域の東西に古墳が造営される。一方で，古墳時代の集落は前期の西打遺跡のみで，古墳群の母体となる集団はいまだ明らかになっていない。

当該地域は『和妙類聚抄』によれば香川郡笠折郷に属する。平安時代末には香西条，南北朝時代香西郡と呼ばれ，江戸時代には笠居村となった。沖積平野を中心に香川郡条里が施工されている。

勝賀廃寺は，勝賀山北麓の瀬戸内海を望む地に立地し，白鳳～平安時代にかけてのこの地の仏教の拠点であったと考えられる。また，現在の根香寺から南東約 1.2㎞に位置する山中には平安時代に中山廃寺が造営され，９～12 世紀を中心として山岳寺院として役目を果たす。位置関係などから根香寺の前身であった可能性が考えられるとともに，出土瓦から讃岐国分寺との関係も想定されている。

このほかに古代の当地域の状況は明らかではないが，香西南西打遺跡では７世紀後半～ 10 世紀の遺物が出土しており，周辺に集落の存在が想定できる。



第２図　高松市における位置図

【中世以降】

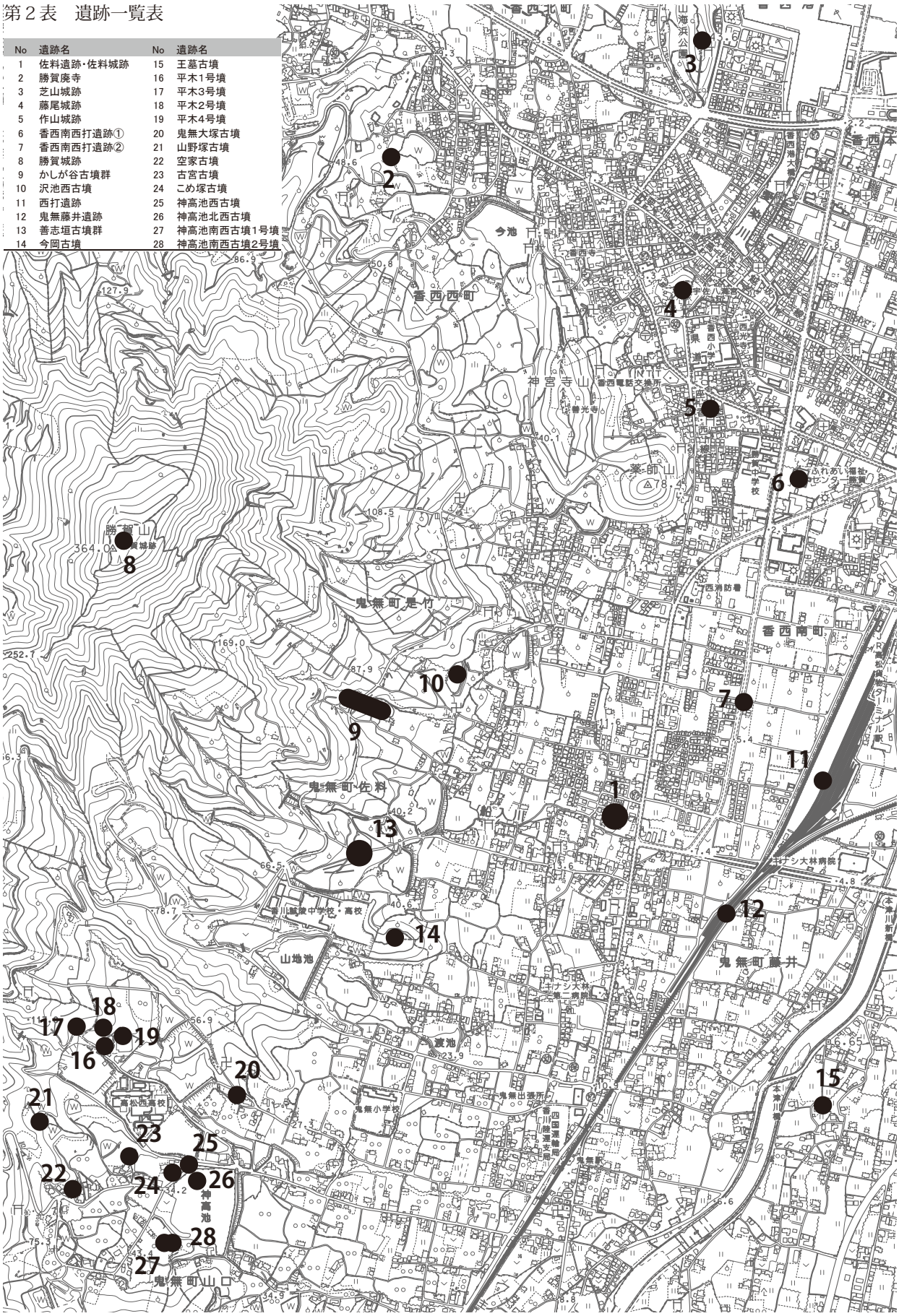
佐料遺跡および佐料城の佐料とは，「讃岐国名勝図会」「綾氏系図」などから都で大番役を務める際に国（讃岐）の一字を氏（綾）の一字に冠して讃綾と呼び召されたことを発端として，それが本貫地の地名となり「佐料」とも書いたと言われている。

佐料遺跡と同じ範囲に位置する佐料城跡は香西氏の初代資村が築城したとされる平城である。1577（天正５）年に 18 代香西佳清が藤尾城に移り住むまでの居館であった。城の南西部にはＬ字状の溝が現存しており，北，東部の地割から周囲を堀で囲んだ 65m 四方の空間が設けられていた。発掘調査が実施されておらず，詳細はいまだ不明である。16 世紀後半に香西氏が居城として社地を利用して藤尾城とする宇佐神社は嘉禄年中（1225～ 1227）に宇佐神宮から香西氏が勧請したと伝えられている。

香西氏の牙城である勝賀城は勝賀山の山頂に位置し初代資村によって築城されたと考えられている。本丸には２箇所に開口部があり，北東部に喰い違いの虎口，土塁，堀切などが良好に残っている。このほかに二の丸，三の

第２表　遺跡一覧表

No	遺跡名	No	遺跡名
1	佐料遺跡・佐料城跡	15	王墓古墳
2	勝賀廃寺	16	平木1号墳
3	芝山城跡	17	平木3号墳
4	藤尾城跡	18	平木2号墳
5	作山城跡	19	平木4号墳
6	香西南西打遺跡①	20	鬼無大塚古墳
7	香西南西打遺跡②	21	山野塚古墳
8	勝賀城跡	22	空家古墳
9	かしが谷古墳群	23	古宮古墳
10	沢池西古墳	24	こめ塚古墳
11	西打遺跡	25	神高池西古墳
12	鬼無藤井遺跡	26	神高池北西古墳
13	善志垣古墳群	27	神高池南西古墳1号墳
14	今岡古墳	28	神高池南西古墳2号墳



第３図　　周辺遺跡分布図

丸といった曲輪などもある。出土遺物から中世後半には城郭として存在していたものと考えられる。高松平野を代表する中世城館である。

また，佐料遺跡の東側に位置する西打遺跡では 11 ～ 12 世紀前半（平安時代末～鎌倉時代）と 13 世紀後半～ 14 世紀前半（鎌倉時代）の条里坪界溝を区画施設とする屋敷地が確認されている。区画施設に囲まれた建物は同じ場所で継続することなく，別の場所に移動している。坪界溝の施工状況から開発の進行状況を知ることができ，これらの現象から笠居郷が鎌倉時代に伊勢神宮の荘園であったことが継続した開発の背景となっていた可能性も想定されている。このほかに作山城の南東に位置する香西南西打遺跡では 15 ～ 16 世紀の堀に区画された屋敷跡が確認されている。香西氏の活躍した当地域ではこのような中世の区画施設をもつ屋敷跡が多数確認されており，香西氏の盛衰を考えるための資料が蓄積されている。

沖積平野部で確認された香西南西打遺跡，鬼無藤井遺跡，西打遺跡等では集落域とともに水田などの生産域が周辺に広がる景観が確認されている。鬼無藤井遺跡，西打遺跡では中世墓も確認されており，集落景観を考える上で重要な資料が蓄積されている。また，これらの集落遺跡では各地の様々な文物が出土しており，『兵庫北関入船納帳』などからも明らかなように香西港を利用した交易活動が行われていたと考えられる。

近世以降については現状では詳細は不明であるが，西打遺跡，香西南西打遺跡等から幕末を中心に陶磁器類が出土しており，近世末に集落が形成されたものと考えられる。丸亀街道沿いに位置し，根香寺から一宮寺へと向かう遍路道が通るなど，現在へとつながる交通の要所であったと考えられ，今後の調査の蓄積が期待される。

明治 14（1881）年に笠居郷は上・中・下の３つの村に区分され，当地域は上笠居村で，昭和 31（1957）年の高松市への合併によって鬼無町となる。

【参考文献】

香川県教育委員会 1996『川西北・七条Ⅱ遺跡　川西北・鍛冶屋遺跡』
香川県教育委員会 2000『西打遺跡』Ⅰ
香川県教育委員会 2002『西打遺跡』Ⅱ
鬼無町誌編集委員会 2007『ふるさと鬼無』
高松市教育委員会 2000a『香西南西打遺跡』
高松市教育委員会 2000b『香西南西打遺跡』
高松市教育委員会 2001『鬼無藤井遺跡』
高松市教育委員会 2005『神高古墳群』
高松市教育委員会 2008『藤尾城跡・作山城跡・附　柿木荒神』
高松市教育委員会 2000『香西南西打遺跡』

第３章　調査の成果

第１節　調査の方法

(1) 調査区の設定

今回の発掘調査は，工事の掘削によって保護層を確保できない建物基礎・梁の設置箇所とロードマップ設置箇所で行った。建物の基礎と梁は，基礎間を連結して梁が設置される計画で，その構造が建物内の縦横に配置される。基礎と梁の掘削幅は異なるが，発掘調査での重機掘削と遺構調査の効率を考慮して，事業者の了解のもと，端に位置する基礎の幅を基準としてトレンチ状に調査区を設定した。調査区の配置は第１図に示すとおりで，10 本の調査区で合計約 273㎡を調査した。

(2) 調査方法

ａ．調査区の設定と掘削方法

調査は，重機の退避路や作業効率に配慮して，事業対象地西側に位置する１トレンチと２トレンチの重機掘削から開始した。重機掘削は，試掘調査の所見で遺構面は基本層序のⅤ層上面であることが判明していたことから，Ⅳ層までの土層を重機で掘削した。なお，Ⅲ・Ⅳ層は一定量の遺物を含むことから，出土状況を観察しながら，遺物量の多い箇所は人力で掘削した。

遺構面までの掘削は上記のとおり進めたが，試掘調査の所見を確認するため，２トレンチのⅢ層上面で遺構検出を試みたが遺構は認められず，Ⅴ層上面が遺構面であることを追認した。

重機掘削ののちⅤ層上面で遺構を検出し，引き続き遺構の調査を行った。各調査区のⅤ層上面の遺構を完掘したのち，遺構の基盤となる自然流路等の調査を行った。遺構の基盤となる自然流路の調査方法は，工事の掘削深度を考慮して実施した。具体的には，計画されている梁の設置に伴う掘削は，自然流路検出面の 30㎝上の高さまでで収まることから，梁の設置箇所に該当する自然流路の掘削は行わず，それ以上の深さで掘削される建物基礎の設置箇所のみ掘削を行うこととした。従って，遺構のベースとなる自然流路等については，保護層を確保できない箇所のみ部分的に調査した。また，自然流路の掘削は，一定の掘削土量が見込まれることから，遺物の多寡や出土状況を観察しながら，重機で行った。

なお，事業者の依頼に基づき本調査期間中に実施した８トレンチの調査は，工事掘削の深度がⅢ層内で収まっており，遺構を保護できることから，遺構面までの掘削は行わなかった。また，Ⅲ層上面で遺構検出を行ったが，遺構は認められなかった。

ｂ．遺構番号と遺物の取り上げ

検出した遺構には，調査区に関係なく遺構の種類ごとに１から番号を与えた。遺構の種類は，現地での調査所見をもとに性格を判断し，遺構番号の上に遺構の略号を冠した。例えば，最初に検出した溝は「SD1」となる。なお，近接する地区で同一の遺構の可能性があるものをいくつか確認したが，堆積状況や位置関係から確実に判断できるもののみ同一の遺構番号とし，確定できなかった遺構については，別の遺構番号を与えた。

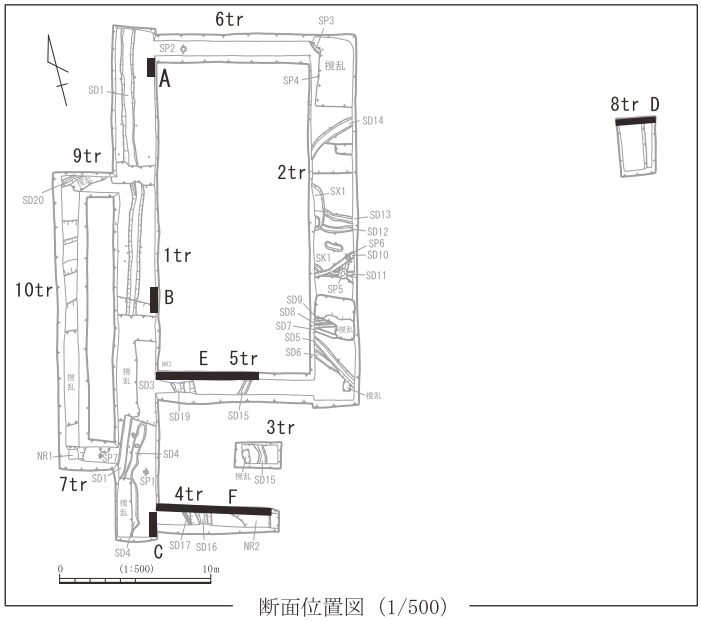
遺物の取り上げは，遺構単位で，かつ出土土層が明らかな場合は層位も記載して取り上げた。なお，SD1・SP5・SX1 の３基の遺構は，個体を認識できる遺物が多数存在したため，平面図と遺物ラベルに遺物の取り上げ番号を記載して取り上げた。遺物包含層から出土した遺物は，現地調査では遺物包含層の細分ができなかったため，後述するⅢ・Ⅳ層を一括して「遺物包含層出土遺物」として取り上げた。また，遺物包含層出土遺物の取り上げは，元位置情報に乏しいと判断できたため，出土層位とおおまかな出土位置のみ記載して取り上げを行った。

ｃ．記録作成

図化作業の際に使用する基準点は，発掘調査の委託業者が選定した測量会社の測量により行った。基準点は，GPS 測量で世界測地系に従った４級基準点を調査担当者が指定する事業対象地内の３箇所に設置した。また，水準点は，調査地に最も近い１等水準点からの直接水準で基準点に標高を移設した。以上のとおり設置した基準点を用いて，平面図・断面図ともに手測りで記録を作成した。

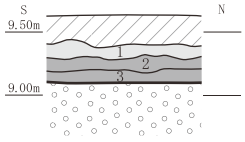
第２節　基本層序

調査地の基本層序は大別して５層に分かれる。Ⅰ層は近年の造成土（層厚 0.20 ～ 0.70 m），Ⅱ層は旧耕作土（層厚 0.05 ～ 0.50 m），Ⅲ層はにぶい黄褐色粗砂や黄灰色シルトなどで構成される土層（層厚 0.20 ～ 0.60 m），Ⅳ層は黒色シルト～粘土（層厚 0.10 ～ 0.35 m），Ⅴ層は灰黄色シルトである。比較的古い形成年代が想定されるⅢ層以下の土層に注目すると，Ⅲ層は調査地全域に分布する土層で，粗砂など粒径の大きい堆積物で構成される。４トレンチで検出した SD16 は，大半が埋没したのちに最上層をⅢ層に被覆され，なおかつ溝の周辺に



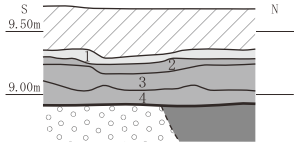
断面位置図（1/500）

A 断面



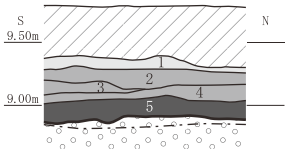
1. 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト質細砂(灰白 細砂を含む)
2. 10YR5/1 褐灰色 シルト質細砂(灰白 細砂を含む)
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト質細砂(灰白 細砂を含む)

B 断面



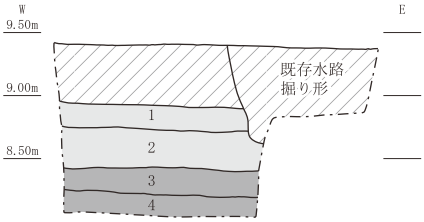
1. 5GY6/3 オリーブ灰色 シルト質細砂(細砂～粗砂を含む)
2. 2.5Y7/3 浅黄色シルト質細砂～
   2.5Y6/1 黄灰色 シルト質細砂(細砂～粗砂を多く含む)
3. 10YR3/1 黒褐色 シルト質極細～細砂(細砂を含む)
4. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト質細砂 +2.5Y7/3 浅黄色 細砂

C 断面



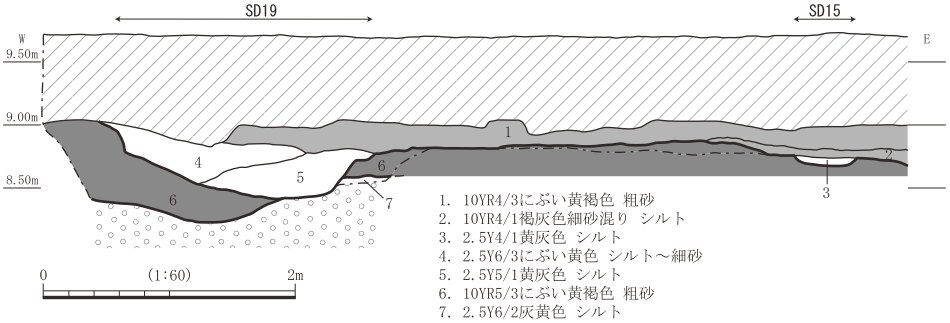
1. 5GY6/3 オリーブ灰色 シルト質細砂
   (細～粗砂を含む)
2. 2.5Y7/3 浅黄色 シルト質細砂～ 2.5Y6/1 黄灰色 シルト質細砂
   (細～粗砂を多く含む)
3. 2.5Y6/1 黄灰色 シルト質細砂(細～粗砂を含む)
4. 10YR5/2 灰黄褐色 シルト質細砂(細砂を含む)
5. 10YR3/1 黒褐色 シルト質極細～細砂(細砂を含む)

D 断面



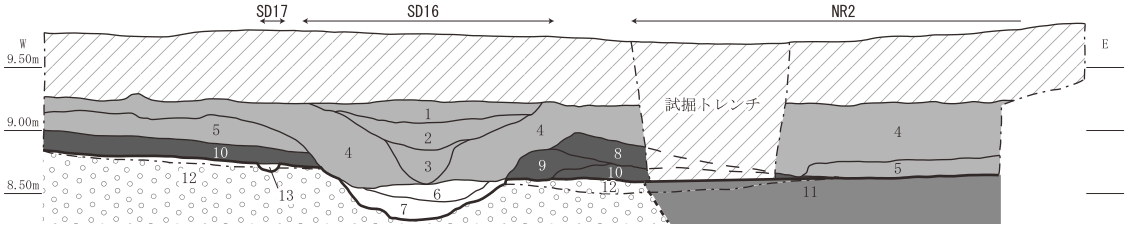
1. 10YR6/1 灰褐色 細砂～シルト
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色 細砂～シルト
3. 10YR5/1 褐灰色 細砂
4. 10YR4/1 褐灰色 粗砂

E 断面



1. 10YR4/3にぶい黄褐色 粗砂
2. 10YR4/1褐灰色細砂混り シルト
3. 2.5Y4/1黄灰色 シルト
4. 2.5Y6/3にぶい黄色 シルト～細砂
5. 2.5Y5/1黄灰色 シルト
6. 10YR5/3にぶい黄褐色 粗砂
7. 2.5Y6/2灰黄色 シルト

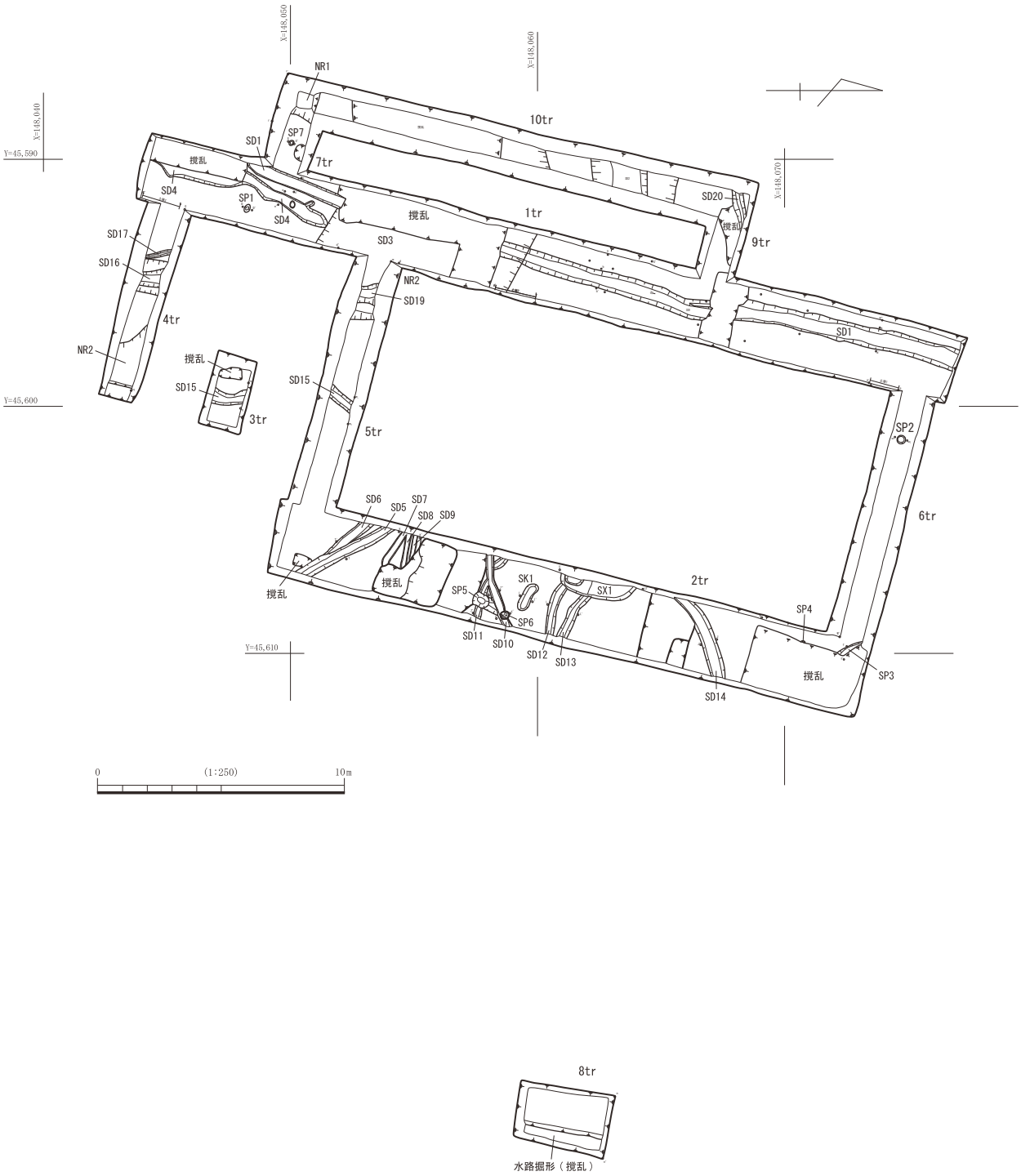
F 断面



1. 2.5Y2/1 黒色 シルト
   (φ5mm の自然礫と地山ブロック含む)
2. 2.5Y5/3 黄褐色 シルト～細砂
3. 2.5Y6/3 にぶい黄色 シルト～細砂
4. 10YR5/3 にぶい黄褐色 粗砂
5. 10YR4/2 灰黄褐色シルト～粘土
6. 2.5Y5/1 黄灰色 シルト
7. 2.5Y6/1 黄灰色 細砂～粗砂
8. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト～粘土
9. 10YR4/1 褐灰色 シルト～粘土
10. 2.5Y2/1 黒色 シルト～粘土
11. 2.5Y6/1 黄灰色 粗砂
12. 2.5Y6/2 灰黄色 シルト
13. 2.5Y2/1 黒色 シルト

Ⅰ層：造成土
Ⅱ層：旧耕作土
Ⅲ層：遺物包含層 A
Ⅳ層：遺物包含層 B
遺構形成以前の流路
Ⅴ層：地山
遺構埋土

第４図　調査区土層図（S= １／60）



第５図　遺構配置図（S= １／250）

オーバーフローした状態で認められた。以上の状況と層相から，Ⅲ層は調査地全域に分布する氾濫堆積物に由来する土層と考えられる。なお，Ⅲ層には遺物が含まれることから，のちに述べるⅣ層と区別するため「遺物包含層 A」と呼称する。Ⅳ層は１トレンチ南側（第４図 C 断面），３トレンチ（第 16 図 SD15），４トレンチ（第４図 F 断面）で確認した調査地南側に堆積する局所的な土層である。Ⅳ層はⅢ層と比較して堆積物の粒径が小さい点が特徴で，おもに粘性のある堆積物で構成される。Ⅲ層とⅣ層の関係を層相の観点から見た場合，上方

に粗粒の堆積物が堆重することが観察でき，この点から先行するⅣ層が堆積する時点では堆積物の堆重が不活発となった当地が，Ⅲ層の堆積する段階では上方へ活発に堆積物が付加されるような堆積環境へと変化したことが予想される。しかし，大局的に見ると，層相は異なるものの，Ⅳ層はⅢ層と同様に氾濫堆積物に起源する土層と考えられる。なお，Ⅳ層も遺物を含むことから，Ⅲ層と区別するため便宜的に「遺物包含層 B」と呼称する。Ⅴ層は層相と遺物を含まない点から，当地の基層をなす自然堆積層（地山）と考えられる。今回の調査で遺構を検出したのは，Ⅴ層上面である。

さて，層序を記載したが，特徴的なのが弥生時代後期の遺構が掘り込まれるⅤ層の上位に，氾濫堆積物と考えられる土層が最も厚く堆積する地点で 60㎝程度認められた点である。このことから，調査地は弥生時代後期の遺跡形成後に上方付加が活発となる点を指摘できる。このことは，調査地周辺が遺跡の形成後も氾濫等によって土砂が運搬されるような不安定な環境下にあったことを示唆するものと考えられる。この点が調査地の層序における特徴で，弥生時代の集落の廃絶等を検討する場合のひとつの指標となるだろう。

第３節　検出遺構の概要

今回の調査では，基本層序Ⅴ層上面ですべての遺構・自然流路を検出した。同一面で検出したが，検出した遺構等を当地の地形面の形成過程を考慮して整理すると，①当地を流下する自然流路等が機能した段階，②自然流路が埋没し，それをベースに当地に集落が形成される段階，以上の２段階に区分することができる。以上の解釈に従って，便宜的に前者をⅠ期，後者をⅡ期として以下に報告する。

Ⅰ期は，当地で自然流路等が機能した段階を示す。今回の調査はトレンチ状に調査区を設けたため，平面で遺構等を連続してとらえることができなかったが，Ⅰ期と考えられるのが，他の遺構との重複関係から判断すると，自然流路２条（NR1・2）と溝１条（SD2）である。2条の自然流路は事業対象地の南側に位置し，1・2トレンチなどでは弥生時代後期の遺構のベースとなる。とくに NR1 は部分的に屈曲した箇所が認められるため，蛇行しながら流下したものと推定される。SD2 は NR1 の北側に位置する溝で，1 トレンチにおいて北へ鋭く屈曲する。SD2 も，弥生時代後期の遺物が大量に出土した SD1 のベースとなることから，SD1 の開削前に機能した溝と位置付けられる。

第３表　遺構一覧表

検出地区	遺構番号	検出地区	遺構番号
土坑		2tr	SD6
2tr	SK1	2tr	SD7
性格不明遺構		2tr	SD8
2tr	SX1	2tr	SD9
ピット		2tr	SD10
1tr	SP1	2tr	SD11
6tr	SP2	2tr	SD12
2tr	SP3	2tr	SD13
2tr	SP4	2tr	SD14
2tr	SP5	5tr 3tr	SD15
2tr	SP6	4tr	SD16
7tr	SP7	4tr	SD17
溝		5tr	SD19
1tr	SD1	9tr	SD20
12tr	SD2	自然流路	
1・10tr	SD4	1・2・5・10tr	NR1
2tr	SD5	4tr	NR2

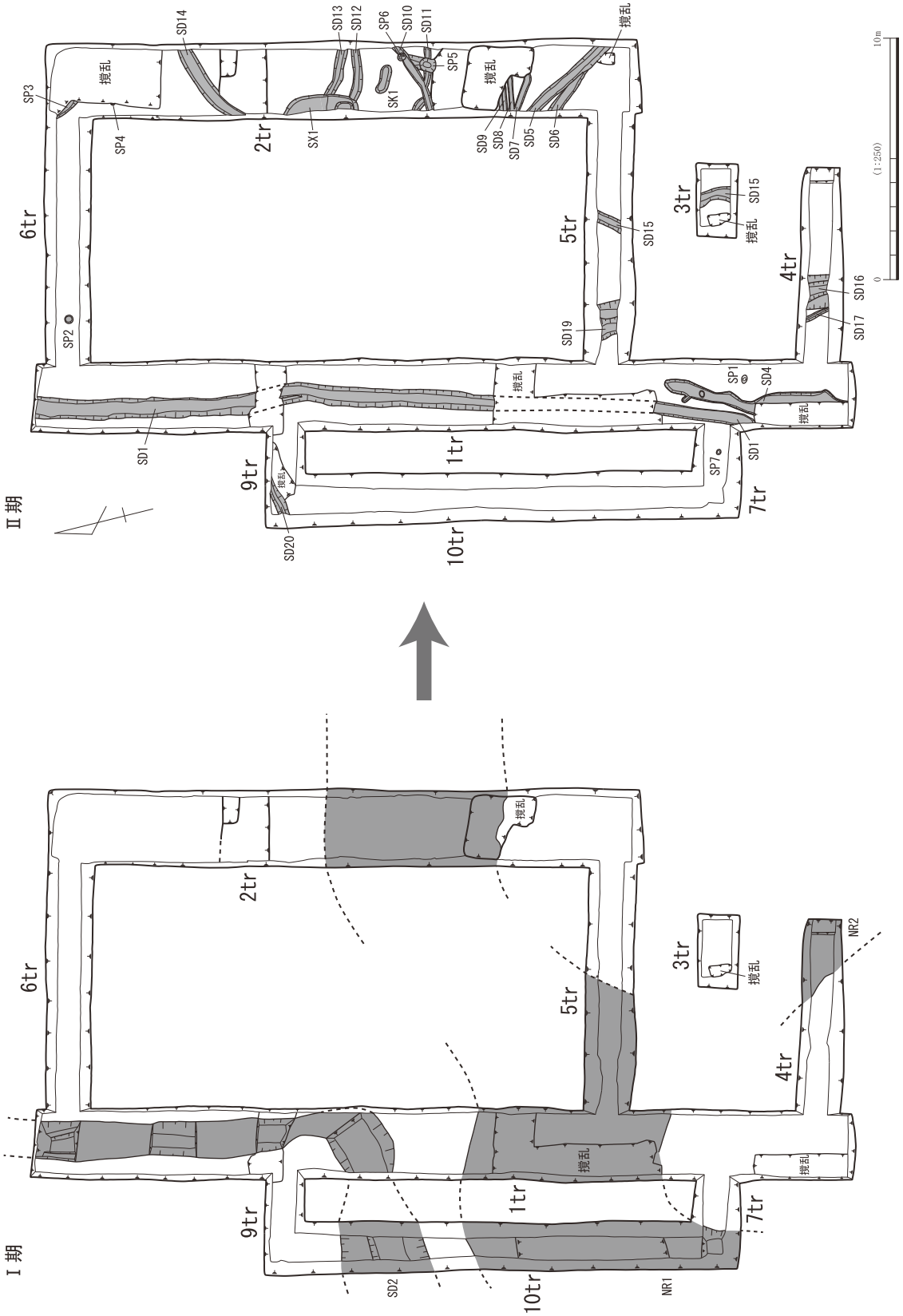
Ⅱ期は，おもに複数の溝を各調査区で検出しており，それ以外にピットを７基(SP1 ～ 7)，土坑を１基(SK1)，性格不明遺構を１基（SX1）検出した。このうち，遺物が大量に出土したのが SD1 で，完形に近い遺物も多数認められた。また，SP5 からも遺存状態の良い土器がまとまって出土した。以上のようにⅡ期の遺構は溝が主体であるものの遺物量も多く，なおかつ土坑などの遺構も存在することから，同一の集落に関わる遺構と考えられる。

第４節　遺構と遺物

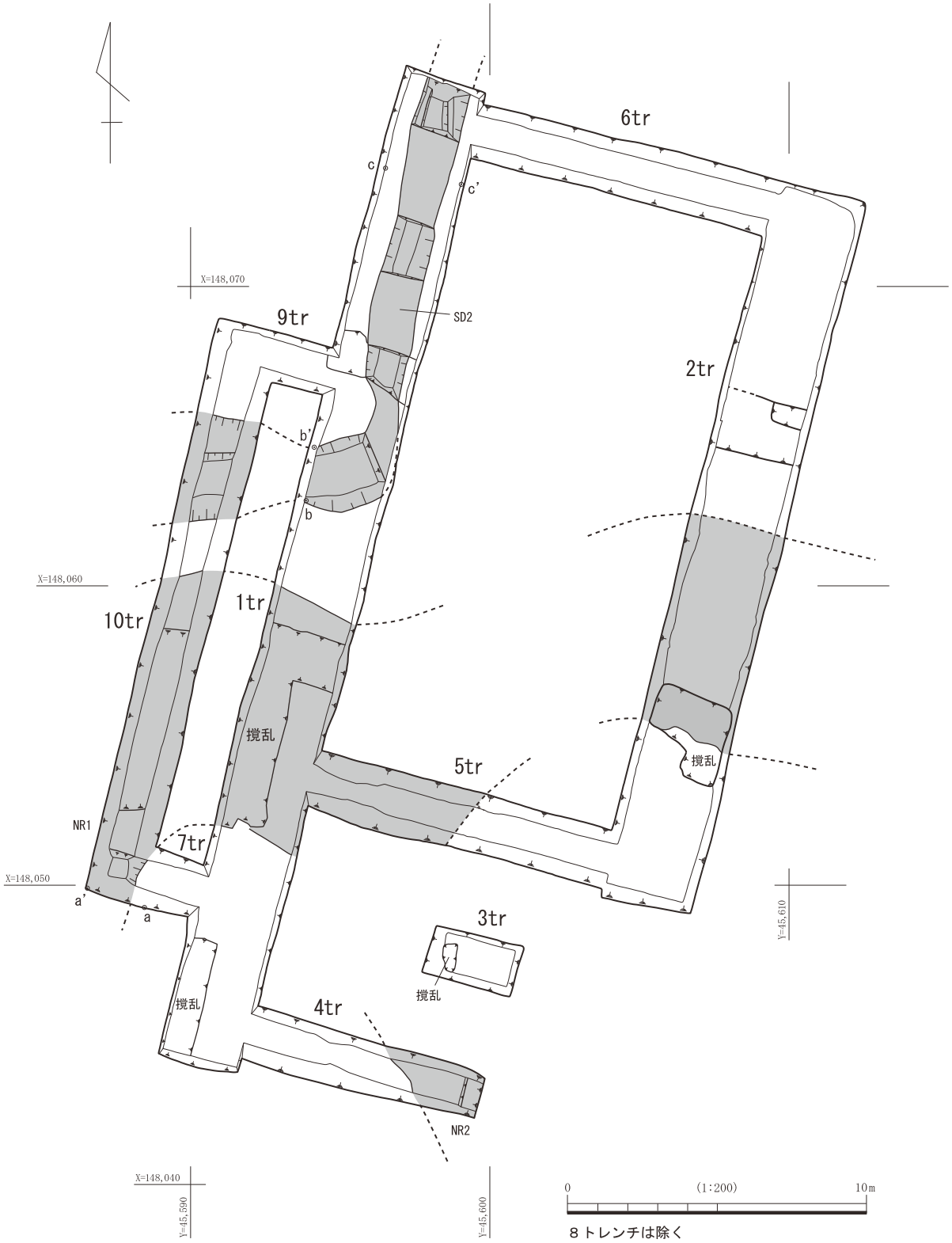
（１）出土遺物の記述について

出土土器は弥生土器が主体であり，これらの胎土の記述については，下記の分類に基いて行った。色調および含有物などをもとに分類を行っているが，色調については焼成，二次焼成など様々な要因が影響するので，含有物の組成，精粗などをもとに胎土を決定している。傾向についてはまとめで詳述する。また，弥生土器以外の遺物は個別に記載している。

胎土 a：非常に精良な胎土で，淡茶褐色～黄褐色を呈し，長石･石英･赤褐色砂粒を含み，非常に微細な雲母（光沢のある砂粒で，微細のため判別が難しいものもある。また角閃石を含むものもある。）を多量に含むが個体によって量の多寡があり，ヴァリエーションがある。本資料は二次焼成などで変色しているものが多く，胎土の粒度，特徴的な微細な雲母の含有状況などに判断



第６図　遺構変遷図（S= 1 ／ 250）



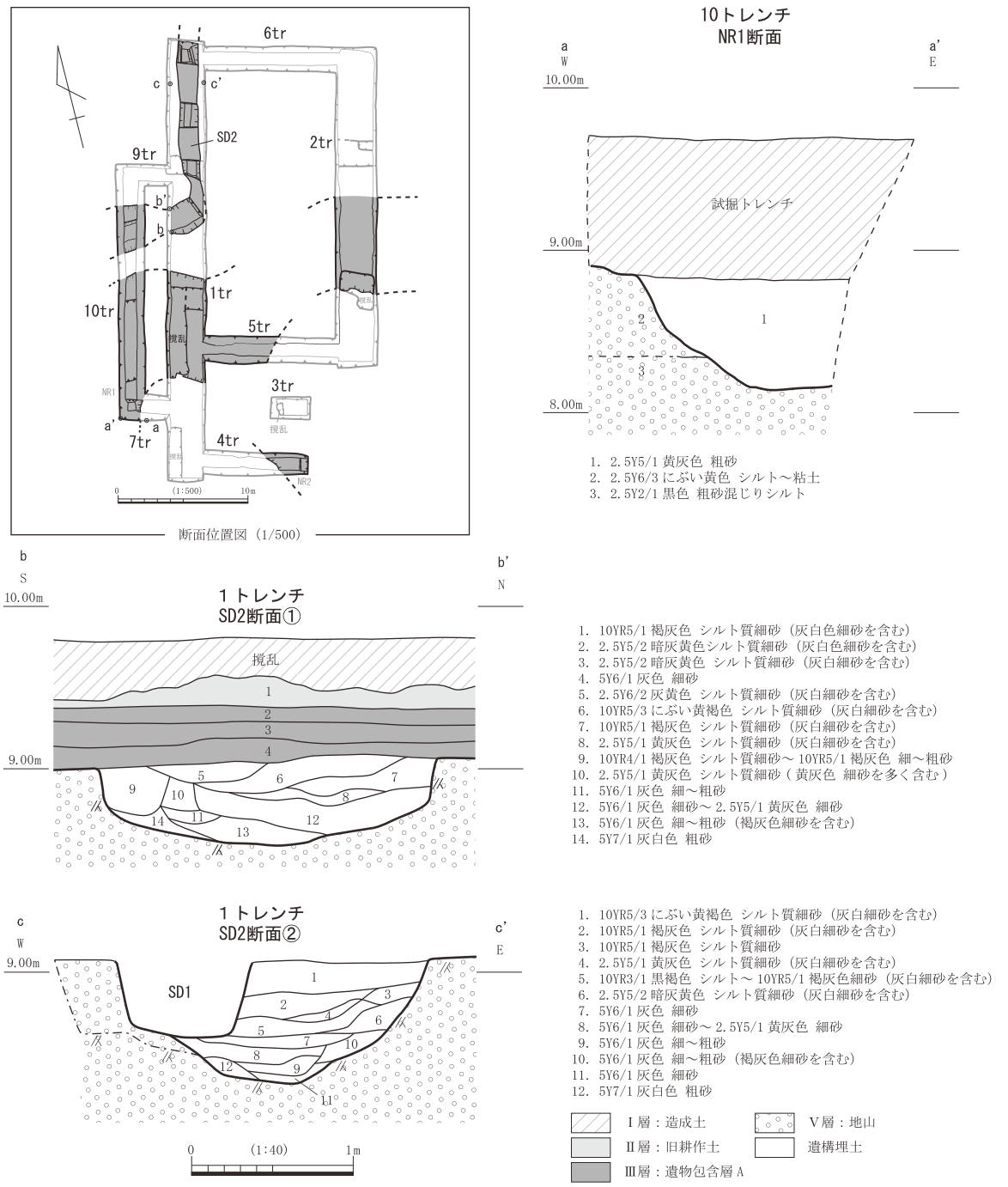
第７図　第Ⅰ期遺構平面図（S=1/200）

したものもある。褐色のものをa'とする。

胎土ｂ：褐色～淡茶褐色を呈する胎土で，角閃石を多量に含む非常に特徴的な胎土である。一般的に胎土１類もしくは香東川下流域産土器と呼ばれるものである。角閃石が少なく雲母を多量に含むものをb'としている。

胎土ｃ：橙褐色～淡橙褐色を呈する胎土で，長石を多量に含みやや粗い。その他，石英，雲母，赤褐色砂粒を含む。見た目は粗く感じるものと精良なものがある。

胎土ｄ：灰白色～白色を呈する胎土で，石英，長石，赤



第８図　NR1・SD2 土層断面図（S=1 ／ 40）

褐色砂粒を含む。

胎土 e：淡黄灰褐色～淡明橙褐色を呈する精良な胎土で，石英・長石と微細な雲母を含む。胎土構成は胎土 a に類似。

（２）Ⅰ期の検出遺構等

SD2

1・10 トレンチで検出した遺構で，1 トレンチ中央で北へ屈曲する。工事によって遺構が破壊される箇所のみ部分的に掘削したため，SD2 の調査は平面形の確認と部分的な断面観察を中心に行った。

SD2 は幅が 1.00 ～ 3.50 m程度とそれほど広くなく，かつ溝の壁面が直立気味に立ち上がることから，人工的に掘削された溝と判断した。SD2 の検出長は約 20.00 m，幅は 1.00 ～ 3.50 m である。1 トレンチの 2 箇所で断面観察を行ったが，南側に位置する断面（第 8 図 SD2 断面①）での溝底部の標高が 8.52 m，北側に位置する断面（第 8 図 SD2 断面②）では標高 8.32 m であることから，北に向けて底部が低くなることが分かる。この点から，SD2 は北流する溝と考えられる。埋土は，双方

の地点で複数の土層に細分できるが，いずれの地点でも溝の上半部に粒径の大きい堆積物が認められることから，洪水等の氾濫によって最終的に埋没したものと考えらえる。SD2 の埋土からは，弥生土器片が出土した。

【出土遺物】

1 ～ 18 は上層もしくは埋土出土で，19 ～ 31 は最下層出土である。

1 ～ 2 は広口壺である。 1 は口縁部片で，焼成は良好で胎土 a である。 2 は口縁端部が屈曲する。口縁部周辺はヨコナデによって仕上げ，外面は細かな縦方向の刷毛目調整で仕上げる。焼成は良好で胎土 a である。復元口径 12.0cm。 3 は細頸壺の口頸部片で，端部がやや外反気味になる。外面は板状工具によるナデ調整で仕上げる。焼成は良好で胎土 b。復元口径 7.8cm。

4 ～ 7 は，くの字口縁の甕である。 4 は口縁部が強く屈曲して外に開き，端部の整形はとても粗雑である。内外面ともに細かい目の刷毛目調整を施すが胎土に水分が多い状態での仕上げで非常に粗雑である。焼成は良好で胎土は a。復元口径 13.6cm。 5 ～ 6 は直線的で， 7 はやや内湾する口縁部を有する甕である。 5 は内外面ともに丁寧なナデ調整によって仕上げる。内外面ともに表面が黒色化している。 6 ・ 7 の外面は縦方向の刷毛目調整後，板状工具によるナデによって仕上げ，内面は成形時の指押さえが認められる。いずれも焼成は良好で，胎土は順に a，b，b'。復元口径 16.0cm，14.4cm，14.3cm。

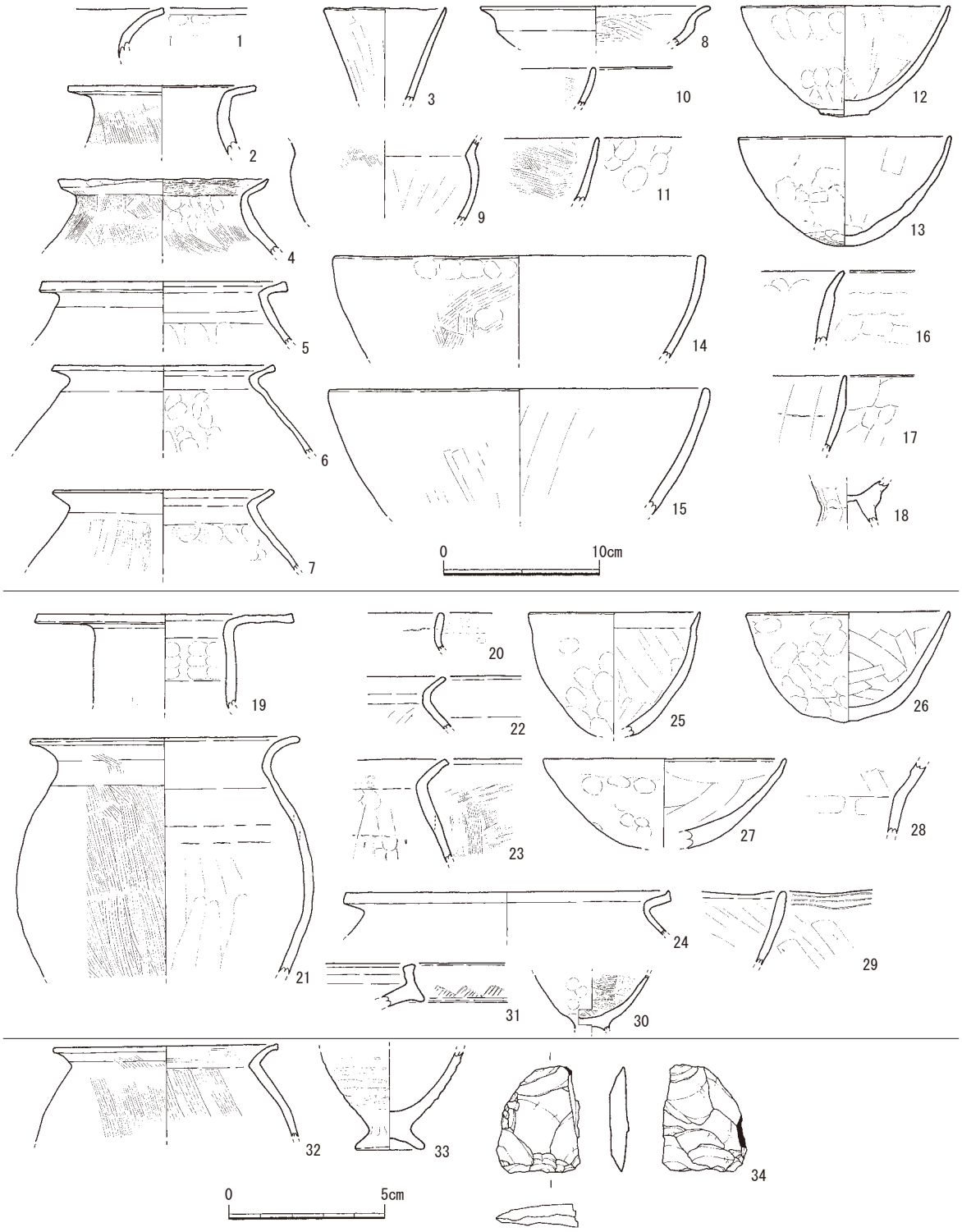
8 ～ 16 は鉢である。 8 は高杯の杯部片の可能性があるが，口径が小さく，復元口径 14.8cm。内面を細かな磨き調整で仕上げる。焼成は良好で，胎土は a。9 はくの字口縁の小型の鉢である。外面は刷毛目調整によって仕上げ，内面は板状工具によるナデによって仕上げる。10 ～ 13 は小型の鉢でいずれも，内面は刷毛目調整によって平滑に仕上げ，外面は叩きもしくは指押さえ等による整形が認められる。12 は底部が残り，13 は削りによって丸底を作り出す。焼成は良好で胎土は順に c，a，a, b'。12 は復元口径 13.3cm, 器高 7.1cm, 底径 3.1cm, 13 は復元口径 13.6cm，器高 7cm。14・15 は中型のボウル状を呈する鉢である。14 はやや粗い刷毛目調整で仕上げ，口縁部付近などに成形時の凹凸が認められる。焼成は良好で黒斑が残る。胎土はやや粗雑であるが a と考えられる。復元口径 23.8cm。15 は外面は縦方向の粗い刷毛目調整もしくはケズリと考えられ，内面が縦方向のナデ調整によって仕上げる。焼成は良好だが二次焼成による変色が著しい。胎土は b' と考えられる。復元口径 24.6cm。16 は口縁部が段をもちやや外反するが形態は不明で，縄文土器の粗製鉢の可能性がある。焼成は良好で，口縁部に黒斑が残る。胎土は a。

17 ～ 18 は製塩土器である。17 は外面は砂粒の動きからケズリと考えられるが，製塩土器特有の粗雑なケズリは顕著でなく，内面も縦方向の板状工具によるナデによる比較的丁寧な仕上げであるので，製塩土器ではない可能性もある。焼成は良好で胎土は b'。18 は脚台部分で，外面は縦方向のケズリによる整形を行う。焼成は良好で，胎土は b。

19 は口縁部を水平方向に引き延ばすタイプの広口壺である。口縁部はヨコナデ調整によって仕上げ，頸部外面は縦方向の刷毛目調整によって仕上げる。内面には整形時の指押さえが残る。焼成は良好で，胎土は b。20 は短頸壺の破片と考えられるが, 小片のため詳細は不明。焼成は良好で胎土は b。

21 ～ 24 はくの字口縁の甕で 21 は外湾，22 ～ 23 は外反する口縁，24 は直線的な口縁である。21 は叩き整形後，縦方向の刷毛目調整で仕上げ，煤が付着している。内面はナデ調整で仕上げる。内面に粘土接合痕が体部最大径よりやや上に 2 箇所残り，内傾接合である。焼成は良好で外面に黒斑が残る。胎土は a。復元口径 17.2cm。22 は小片のため内外面の調整は不明である。焼成は良好で胎土は c。23 は細かな叩き工具による整形後，縦方向の刷毛目調整で仕上げる。内面は粗いナデ調整である。焼成は良好で胎土は a。24 は口唇部をヨコナデ調整によって上部につまみ上げるタイプである。焼成は良好で胎土は c。復元口径 21.0cm。

25 ～ 30 は鉢である。25 はやや内湾するくの字状の口縁部を呈し，底部は丸底と考えられる。外面は指押さえもしくは叩きによって成形する。内面は板状工具によるナデ調整による。焼成は良好で外面は黒斑で覆われている。胎土は a。復元口径 11.0cm。26・27 は丸底の小型の鉢で，26 の外面は指押さえもしくは叩きによって成形し，底部はケズリによって丸底にする。内面は板状工具によってナデ調整で平滑に仕上げる。焼成は良好で底部外面に黒斑が残り，胎土は a。復元口径 13cm, 器高 7.1cm。27 は浅鉢で，外面は指押さえもしくは叩きによって成形し，内面はナデによって仕上げる。焼成は良好で胎土は a。復元口径 15.6cm 。28 はくの字状の口縁を呈する大型の鉢である。小片のため調整は不明である。焼成は良好で胎土は b。29 は口縁部外面に 3 条の凹線を施す。不明瞭であるが，内外面ともにケズリと考えられる。焼成は良好で，二次焼成のため赤褐色に変色が著しいが胎土は a と考えられる。30 は脚付きの



第９図　SD2・NR1 出土遺物（S= １／４・１／２）

小型の鉢である。外面は凹凸が著しく，内面は細かな刷毛目調整によって仕上げる。焼成は良好で胎土は c と考えられる。31 は大型器台の受け部片である。受け部の外面には鋸歯文を施す。焼成は良好で胎土は b。

NR1

調査地の南側で検出したもので，２トレンチでは弥生時代後期の遺構のベースとなることから，弥生時代後期以前にすでに埋没していたことが分かる。NR1 は平面形が蛇行し，かつ幅が広いことから自然流路と判断した。NR1 も大部分の箇所が工事で破壊されることがないため，平面形の確認と一部分の断面観察を中心に調査を行った。なお，後述する NR2 とは位置関係から関連

性も想定されるが，検討できる箇所に調査区を設定できず，関連性の有無を明らかにすることはできなかった。

NR1 の検出長は約 20.00 m，幅は 7.00 ～ 8.00 m程度で，5 トレンチ中央と 10 トレンチ南端で平面形が屈曲していることから，蛇行しながら流下したものと考えられる。NR1 は 10 トレンチ南端と 1 トレンチ南側で，部分的に掘削して断面観察を行った。このうち，10 トレンチ南端の断面観察地点（第 8 図 NR1 断面）は NR1 の東岸付近にあたり，検出面からの深さは約 0.70 m，埋土は黄灰色粗砂の単層であった。自然流路の岸付近であるため中央部はさらに深くなるものと考えられるが，埋土の特徴として土層の細別ができず，粒径の大きい堆積物で一度に埋没している点が観察できた。このことから，NR1 は洪水などを要因として短期間に埋没したことが予想される。なお，隣接する 1 トレンチの NR1 中央付近で断ち割り調査を行った。その結果，NR1 の深さは検出面から 1.20 m以上あることが判明したが，底部の検出には至らなかった。ただし，埋土は 10 トレンチの所見と同様に粗砂の単層であることから，少なくとも NR1 の最終埋没は洪水等が要因であったと考えられる。NR1 からは，弥生土器小片などが出土した。

【出土遺物】

32 はくの字口縁の甕で，口縁部は鋭く外反する。外面は縦方向の刷毛目調整によって仕上げ，その後口縁部を成形している。内面は口縁部を横方向の刷毛目，体部は縦方向の刷毛目調整によって仕上げる。焼成は良好で胎土は b'。復元口径 14.4cm。

33 は脚台付きの小型の鉢である。外面は粗い叩きによって成形し，内面はナデ調整によって仕上げる。内面には付着物の痕跡も認められる。焼成は良好で黒斑が明瞭に残る。胎土は a。

34 はサヌカイト製の楔形石器である。最大長 3.4cm，最大幅 2.7cm，最大厚 0.8cm，重さ 7.6g。

NR2

4 トレンチで西岸のみ検出した。NR2 の最上層の層相の観察から，自然流路の可能性が高いと判断した。なお，NR2 は平面形を確認したのみで，掘削は行っていない。北側に隣接する 3 トレンチで NR2 に対応する平面形が認められなかったことから，3 トレンチまでで収まるものと考えられる。この見方が正しければ，NR2 の幅は 2.00 ～ 3.00 m程度が想定される。なお，NR2 の位置関係から北側の NR1 に接続する可能性も考えられるが，検証できる箇所に調査区が存在せず，その点を明らかにすることはできなかった。NR2 の埋土は，最上層に黄灰色粗砂が認められたが，それより下位の堆積状況は不明である。

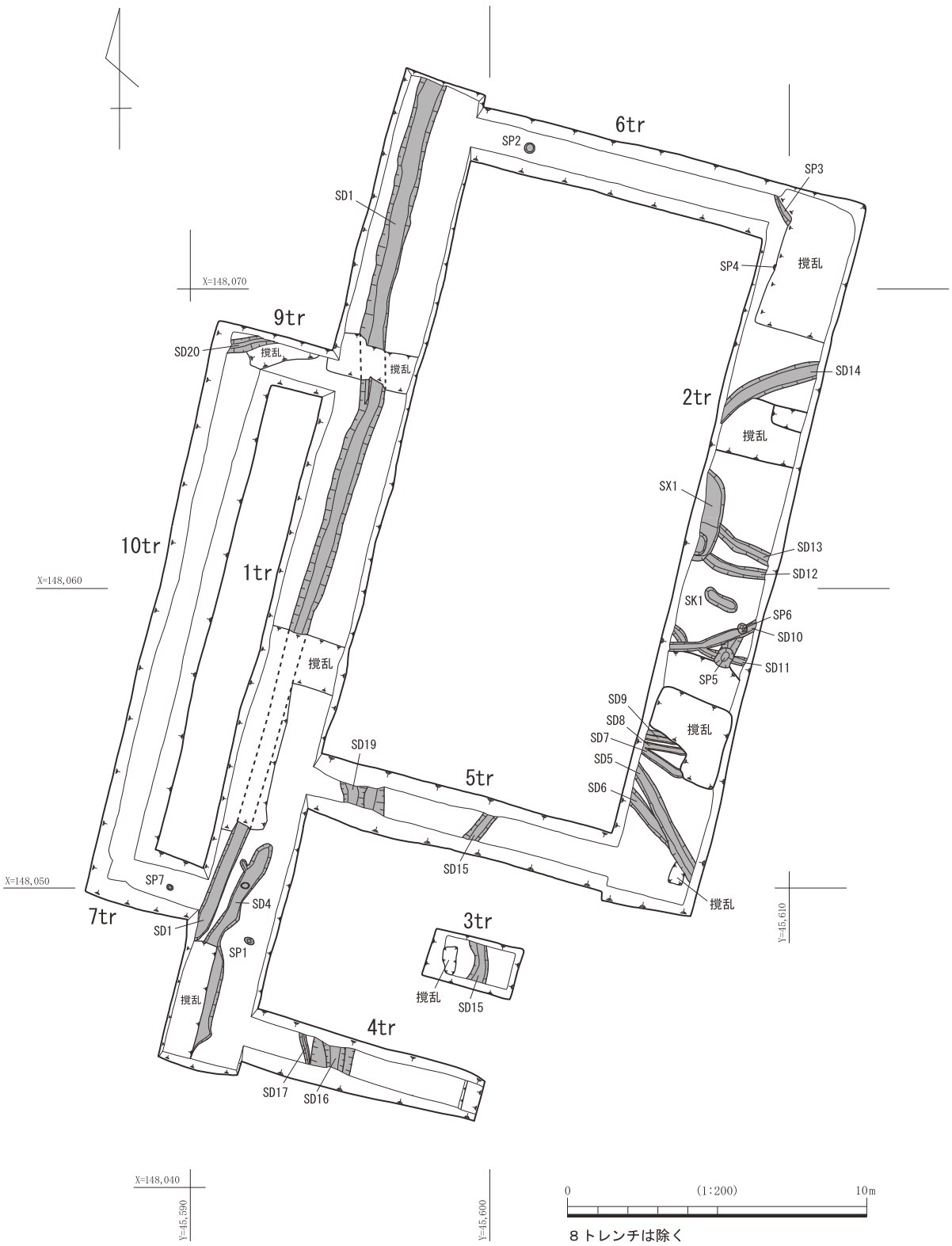
（3）Ⅱ期の検出遺構等

SD1

1 トレンチで検出した南北方向の溝で，後世の撹乱に遺構の一部分を破壊される。また，SD1 は SD2 と重複関係があり，平面検出の際に SD1 の掘り形が明瞭に観察できたことから，SD2 が埋没したのちに SD1 が開削されたと判断した。SD1 は 1 トレンチ北側でやや蛇行するもののほぼ直線的に南北方向に掘削されており，検出長は約 30.00 m，幅は 0.40 ～ 1.00 m，検出面からの深さは 0.28 ～ 0.46 mである。

SD1 ではトレンチの北・中央・南の 3 箇所で断面観察を行った。最も南側の断面（第 11 図 SD1 c 断面）での溝底部の標高が約 8.78 m，最も北側の断面（第 11 図 SD1 a 断面）での溝底部の標高が約 8.60 mであることから，北へ向けて溝の底部が低くなることが分かる。SD1 の埋土は地点によって細部に違いを見せるものの，大別して 2 層に分けることができる。上層が粗砂を主体とする土層，下層が上層よりも細かい堆積物からなる土層である。このうち，上層は粒径の大きい堆積物で構成されることから，洪水などを要因として比較的短期間に埋没したものと考えられる。下層は，上層よりも粒径が小さいものの砂系の堆積物で構成されることから，SD1 が機能した際の流水を示す土層の可能性がある。なお，上層は 3 地点の断面すべてで観察できるのに対し，下層は最も北側に位置する a 断面のみで確認した。また，上層の層厚は，b・c 断面では 0.30 m前後が堆積するものの，a 断面では 0.12 mの厚さしか認められず，北へ向けて層厚を減じる傾向が認められた。上層は洪水などを要因として運搬された土層と考えられるため，この見方が正しければ上層の供給源は調査地の南方にあった可能性を考えることができる。以上を整理すると，SD1 は流水のある南北方向の溝で，一定期間の流水があったのち最終的に洪水などを要因として埋没したと考えられる。

SD1 からは比較的遺存状態の良い遺物が多数出土した。大半の遺物は SD1 の b 断面よりも北側の上層から出土した。多数の遺物が出土した上層は洪水によって埋没した土層と考えられることから，溝の埋没途上に廃棄されたというよりも，洪水などの土砂とともに下流側から運搬された遺物と解釈する方が妥当と考えられる。

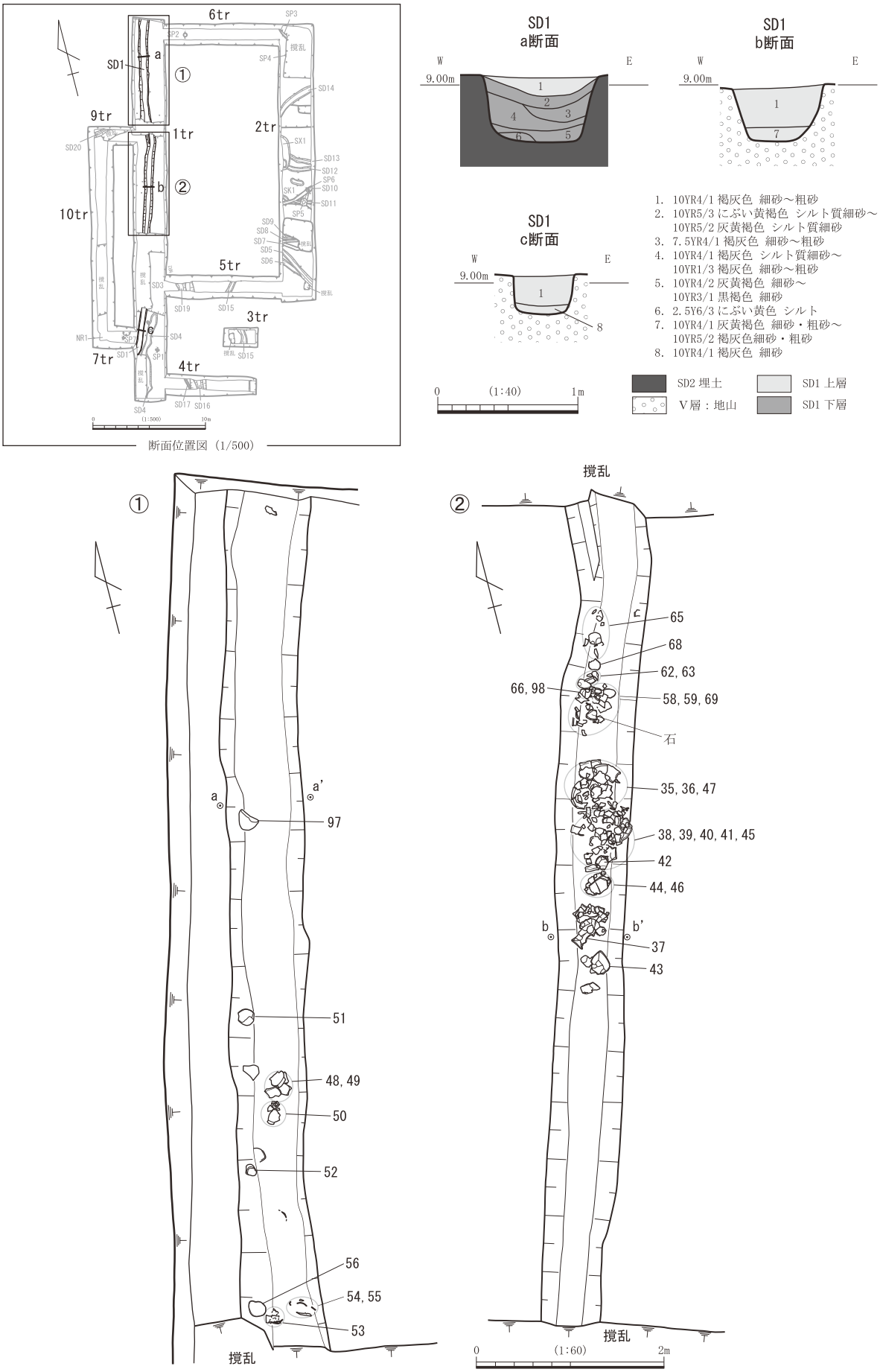


第 10 図　第Ⅱ期遺構平面図（S= 1 /200）

【出土遺物】

上層部分に土器溜りと考えられる土器群が認められた。それらが 35 ～ 47，48 ～ 52，53 ～ 56 である。72 ～ 86 は上面および上層で出土したその他のものである。87 ～ 103 は中層・埋土中として取り上げたものである。104 ～ 112 は下層出土のものである。

この中には上面出土 72・73 は土師器の杯，74 は須恵器の捏鉢，112 は須恵器の鉢があり，時代の下る遺物が含まれている。特に 112 は下層からの出土であり，SD1 の時期を決める上で問題となる。調査所見で



第 11 図　SD1 平面図・土層断面図（S= 1 /40・1 ／ 60）

は 72・73 は検出面であることから新しい時期の遺構等のものを巻き込んだと判断しており，112 は攪乱附近の出土であり，いずれも混入と判断している。57 ～ 71 は埋土中であるが，同様なレベルから出土し，番号をつけて取り上げたものである。71 はサヌカイト製の楔形石器である。

35 ～ 37 は長頸壺である。35 は口縁端部をややヨコナデによってつまみあげ，口唇部は平坦に仕上げる。内外面ともに丁寧なナデによって仕上げる。焼成は良好で胎土は b。復元口径 14.8cm。36 はヨコナデによって口縁部を水平方向に引き延ばすものである。内外面ともに剥落が著しい。焼成はやや不良で胎土は c。復元口径 39cm。37 は，頸部は直線的に立ちあがった後，口縁部を入念なヨコナデによって横方向にやや引き延ばす。口頸部には２条の沈線を施す。底部は鈍くなり，丸底化を呈する。外面は縦方向の細かな刷毛目調整で仕上げた後，体部下半には磨きを施す。内面は頸部整形時に指押さえと横方向の刷毛目調整を施し，体部下半に横方向のケズリを施す。頸部の接合箇所，体部最大径には粘土接合のための指押さえが顕著に認められる。焼成は良好で外面底部付近に黒斑が残る。胎土は b'。復元口径 17.3cm，器高 28.8cm，復元底径 7.2cm。

38 ～ 40 はくの字口縁の甕で，いずれもヨコナデ調整によって口唇部をややつまみあげ，平坦にする。また，頸部にもヨコナデ調整を念入りに施し，壺のような頸部を意識した形態である。38 はナデ調整によって仕上げ，39・40 は外面を縦方向の刷毛目調整によって仕上げる。内面にはいずれも成形時の多数の指押さえが認められる。焼成は良好で胎土はいずれも b。順に復元口径 16.8cm，18.0cm，15.9cm。41 は甕の底部片で，外面は底部まで丁寧なヘラ磨きで仕上げる。内面はケズリで仕上げ，おこげが付着している。焼成は良好で胎土は b。底径は 5.5cm。

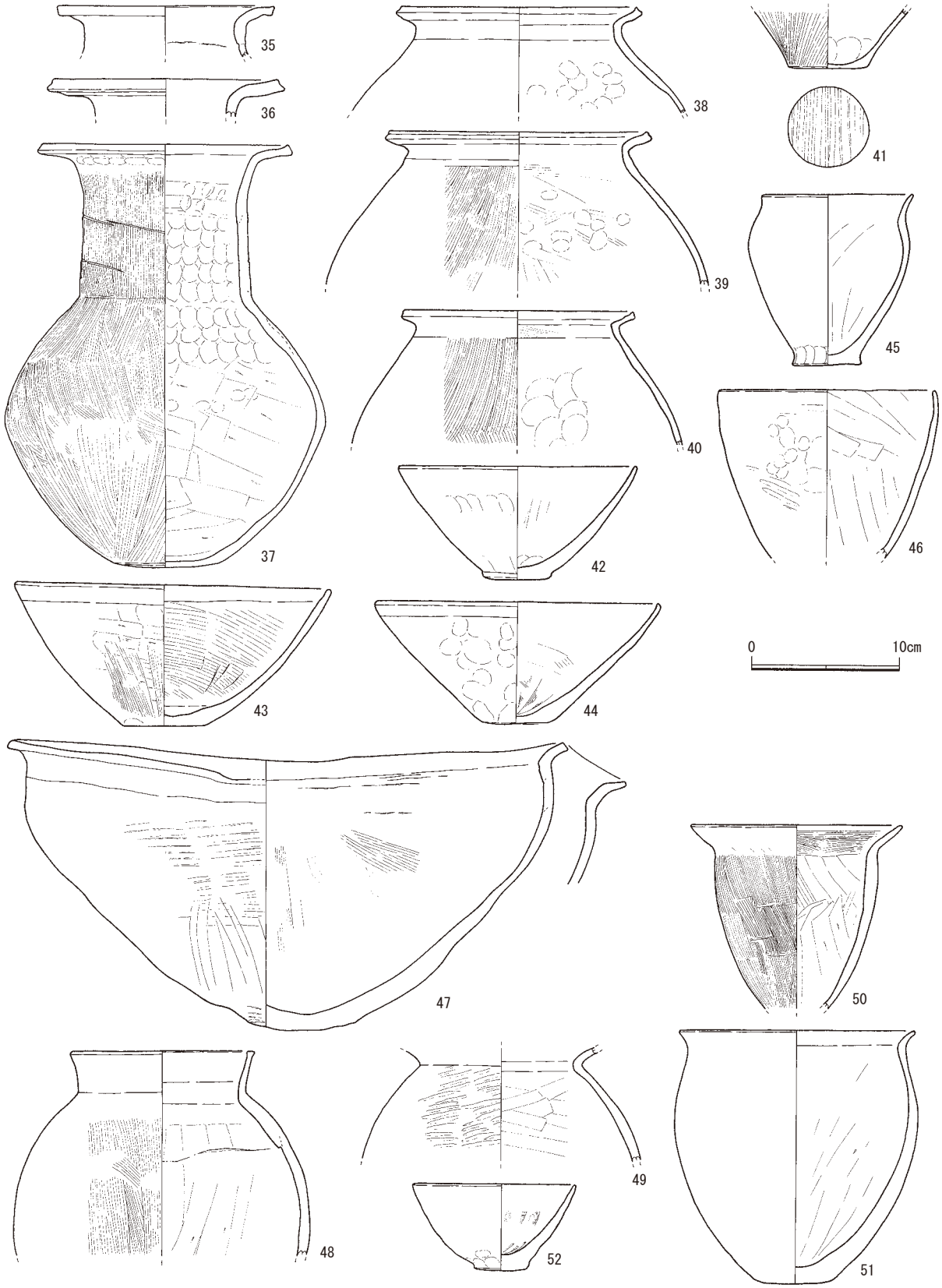
42 ～ 44 はハの字に開く小型の鉢である。42 は器面が磨滅しており詳細は不明であるが，指押さえによる整形の痕跡が認められる。底部はややつぶれており，内面にはおこげが付着している。焼成は不良で，胎土は a。復元口径 16.2cm，器高 7.7cm，底径 4.5cm。43 は，外面は横方向のケズリ後縦方向の刷毛目調整で仕上げる。さらに口縁部周辺はヨコナデ調整を施し，やや内側に内湾する。内面は粗い刷毛目調整を回転しながら施す。外面には煤が付着している。焼成は良好で外面に黒斑が残る。胎土は a。復元口径 21.6cm，器高 9.3cm，底径 5.6cm。44 は器面が剥落しており，不明瞭であるが外面に指押さえが認められる。焼成はやや不良で，外面に黒斑が残る。胎土は a。復元口径 19.2cm, 器高 8.25cm, 底径 4.4cm。45 は口縁部が如意形に外反する小型の鉢で，やや特異な形態を呈する。器面が剥落しており不明瞭であるが，底部付近は指押さえが残る。内面は板状工具によるナデ調整で仕上げる。焼成はやや不良で外面に大規模に黒斑が残る。胎土は a。口径 10.2cm，器高 11.6cm，底径 4.6cm。

46 は脚台がつくタイプの鉢である。外面は叩き成形した後，指押さえやナデ等によって調整しているものと考えられる。内面は丁寧なナデ調整で仕上げる。焼成は良好で黒斑が内外面に残る。胎土は a と考えられる。復元口径は 14.8cm。47 はくの字口縁の片口の大型鉢である。外面は叩きによって成形し，板状工具によるナデを施す。内面は縦方向の刷毛目調整によって仕上げる。口縁部は叩き成形後，ナデによる折り曲げによって成形している。底部は叩きによって丸底化を図る。焼成は良好で内面および外底部に黒斑が残り，胎土は a。口径 40.5cm，器高 19.7cm，底径 7.5cm。

48 は直口壺である。外面は縦方向の刷毛目調整で仕上げ，口縁部付近はナデ調整によって仕上げ，口唇部は内面にややつまみ出す。内面は縦方向の削りによって仕上げる。焼成は良好で胎土は c。復元口径は 12.5cm。

49 はくの字口縁の甕で，外面は粘土が水分を多く含んだ状態で粗い叩きで成形している。内面は板状工具による横方向のナデによって仕上げる。焼成は良好で胎土はやや白色を呈するが a と考えられる。50 はくの字口縁の小型の甕（鉢）で，外面は縦方向の細かな刷毛目調整，内面は口縁部を横方向の刷毛目調整，体部は刷毛目調整後に縦方向のケズリで仕上げる。外面には煤が付着する。焼成は良好で胎土は b'。復元口径 14.3cm。51 はくの字口縁の小型の甕もしくは鉢である。外面は磨滅のため不明だが板状工具によるナデのような痕跡がわずかに認められる。内面は削りによって仕上げる。焼成は良好で胎土は a。口径 15.9cm, 器高 17.2cm, 底径 5.2cm。52 は小型の鉢である。明確な底部があり，器面が剥落しており不明瞭であるが，外面は指押さえが認められ，内面には横方向の刷毛目調整で仕上げる。焼成はやや不良で，底部周辺に黒斑が残る。胎土は c と考えられる。復元口径 11.1cm，器高 5.9cm，底径 3.6cm。

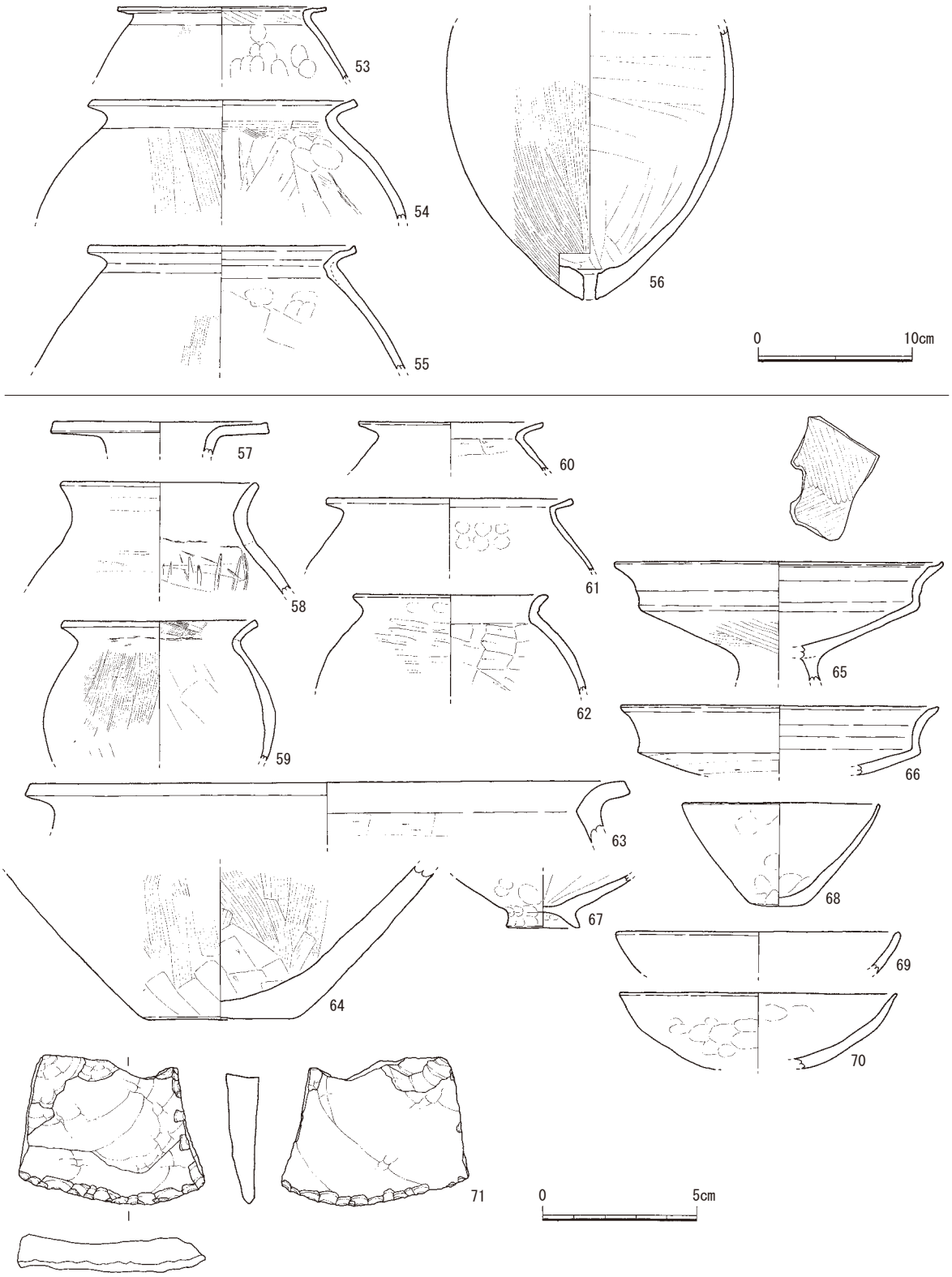
53 ～ 55 はくの字口縁の甕である。いずれも口縁部付近をヨコナデによって整形し，上に鋭くつまみ上げる。外面は縦方向の刷毛目調整後口頸部をヨコナデによって施す。内面は整形時の指押さえと縦方向のケズリを施す。



第 12 図　SD 1 出土遺物①（S=1/4）

口頸部付近は斜方向の刷毛目調整によって仕上げる。焼成は良好で胎土は，53 が b，54・55 が b'。復元口径は順に 14.3cm，17.5cm，17.3cm。

56 は有孔鉢の体部片である。焼成前穿孔で，内側から穿孔している。外面は縦方向の粗い刷毛目調整，内面が板状工具による胴部上半は横方向，下半は縦方向にナ



第 13 図　SD 1 出土遺物②（S=1/4）

デ調整で仕上げる。焼成は良好で底部付近の内外面に黒斑が認められる。胎土はやや淡茶褐色を呈するが a と考えられる。

57 は広口壺の口縁部片で，水平方向に口縁部を引き伸ばすタイプで，口唇部は上に鋭く引き伸ばす。焼成は良好で胎土は c。復元口径 13.8cm。58 は直口壺の口縁部片である。外面は黒斑のため不明瞭だが，わずかに磨きが認められる。内面の体部付近にはヘラ状の工具による筋状の圧痕があり，頸部と体部の境界付近に粘土接合痕跡が認められる。焼成は良好で，外面に黒斑が残る。

胎土はaと考えられる。復元口径12.9cm。

59～62はくの字口縁の甕である。59・60はやや外反し，61は直線的，62は強く外反する。63は大型の甕の口縁部断面がL字状を呈する。59は外面を縦方向の丁寧な刷毛目調整で仕上げ，内面は口縁部を横方向の刷毛目調整，体部は頸部までケズリ上げる。焼成は良好であるが全体に黒斑が及び，胎土の判断は難しいがaと考えられる。復元口径14.8cm。60は器壁が薄く，外面は縦方向の刷毛目調整で仕上げる。内面はケズリと考えられる。焼成はやや不良で口縁部外面に煤が付着している。胎土はa。復元口径12.0cm。61は口縁部周辺を丁寧なヨコナデ調整によって仕上げる。体部は器面が剥落しているが外面を粗い叩きによる成形で内面はヨコ方向のケズリである。焼成は良好で胎土はc。復元口径は11.1cm。62は器面が剥落しており詳細は不明瞭。内面に指押さえがわずかに認められる。焼成はやや不良で，胎土はb'。復元口径は16.2cm。63は口縁部内外面を丁寧なヨコナデ調整で仕上げ，内面は横方向のケズリで仕上げる。焼成は良好で胎土はa。復元口径39.4cm。

64は大型土器の底部片で，外面は縦方向の刷毛目調整後ナデ調整を底部付近に施す。内面は縦方向の刷毛目調整を施した後底部はヘラ削りで仕上げる。焼成は良好で内面に明瞭な黒斑が残る。胎土はa。底径は10.2cm。65～66は高杯の杯部片で，口縁部をヨコナデ調整によって成形する。65は杯部を内外面ともに分割磨きを施す。不明瞭であるが外面を削った後磨きを施していると考えられる。焼成は良好で，胎土はb。復元口径は21.2cm。66は器面剥落のため不明瞭であるが，外面をヘラ削りで，口縁部は丁寧なヨコナデによって仕上げ，口縁端部内面は凹む。復元口径20.6cm。67は鉢の脚部片と考えられ，脚部端部はつまみ出しによって作り出す。内外面にはその指押さえが顕著に残る。内面は板状工具によるナデを回転的に施したと考えられる。焼成は良好で，胎土はc。脚部径は4.8cm。68～70は小型の鉢で，68は深い，69・70は浅いタイプである。68は不安定な平底で，69～70は丸底と考えられる。68は器面剥落のため詳細は不明であるが，内外面に整形時の指押さえが認められる。焼成はやや不良で，内外面ともに黒斑が残る。胎土はa。69は小片のため詳細は不明であるが，内面はナデ調整によって仕上げる。焼成は良好で胎土はa。復元口径は18.6cm。70は口唇部を鋭く引き伸ばす。外面は指押さえが顕著に認められ，内面は丁寧なナデ調整を施す。焼成は良好で，胎土はb。復元口径は18.0cm。

71はサヌカイト製のスクレイパーである。最大長4.8cm，最大幅6.1cm，最大厚1.2cm，重さ39.9g。

72は土師質土器の小皿で小片のため詳細は不明で焼成は良好で，胎土は精良で淡橙色を呈する。復元口径8.6cm。73は土師質土器の杯で轆轤整形による凹凸が明瞭で，底部ヘラ切り。焼成は良好で，胎土は長石と赤色砂粒を含み，淡灰橙色を呈する。復元口径10.6cm。74は須恵器の捏ね鉢の口縁部片である。焼成は良好で，胎土は精良で青灰色を呈する。

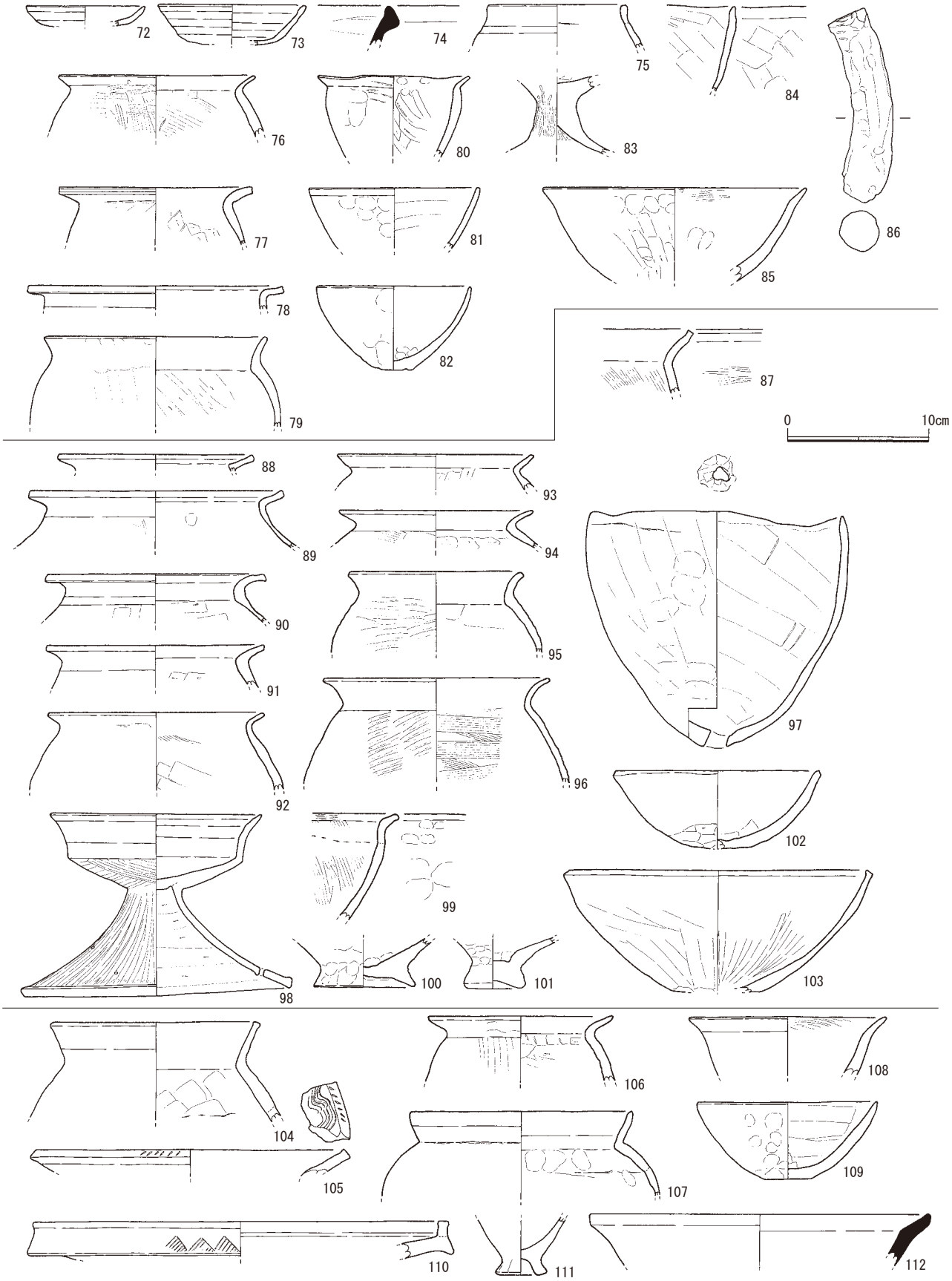
75～111は弥生土器である。75は短頸壺の口縁部片と考えられるもので，小片のため詳細は不明。焼成は良好で胎土はb。復元口径は10.0cm。76～79はくの字口縁の甕である。76は短く折り曲げる口縁で端部は丸く収める。外面は叩き成形後縦方向の刷毛目調整で仕上げる。内面は斜め方向の粗い刷毛目調整を施す。焼成は良好で，胎土は黒褐色のため判断が難しいが，aと考えられる。復元口径は14.0cm。77はやや外反して立ち上がる。口唇部は凹線状に凹む。頸部外面に口縁部成形時の指押さえが残る。内面は縦方向のヘラ削りで仕上げる。焼成は良好で胎土はaと考えられる。復元口径13.8cm。78は屈曲した後，直線的に引き伸ばし，口唇部はやや上につまみ上げる。焼成は良好で胎土はb'。復元口径は18.0cm。79は口縁部が外反して立ちあがる。口唇部は丸く収める。器面剥落のため，詳細は不明であるが，外面はナデ調整，内面はヘラ削りである。焼成は良好で胎土はc。復元口径は15.8cm。

80はくの字口縁の小型の鉢で，外面は叩き成形後，ナデ調整を施す。内面は縦方向のヘラ削りである。焼成はやや不良で黒斑が明瞭に残る。胎土はaと考えられる。口径は10.8cm。

81～82は小型の素口縁の鉢である。82はやや稜をもつ小型の底部である。外面は指押さえ状の凹凸が認められる。内面はナデ調整によって仕上げる。焼成は良好で胎土はaと考えられる。81は復元口径12.1cm，82は復元口径11.0cm，器高6.0cm，底径2.6cm。

83は高杯の脚部片である。器面剥落のため不明瞭であるが，外面は細かな縦方向の磨き調整で仕上げ，内面には成形時の絞り痕跡が認められる。焼成はやや不良で，胎土はcと考えられる。

84は鉢の口縁部である。内外面ともにケズリのような粗いナデ調整によって仕上げる。口唇部は強いナデ調整によって整形している。焼成は良好で，胎土はa。85は鉢で，口縁部を外反させる。口縁部周辺は指押さえとヨコナデによって整形されている。体部外面は縦方



第 14 図　SD １出土遺物③（S=1/4）

向のヘラ削りである。内面は丁寧なナデ調整で仕上げる。焼成は良好で，胎土は a と考えられる。復元口径 18.8cm。

86 は土製品で，把手状を呈する。指押さえによる整形後，ナデ調整によって平滑に仕上げる。焼成は良好で胎土は a。87 はくの字口縁の甕である。口頸部の屈曲は緩やかにやや内湾し，口唇部を少しつまみ上げる。焼成は良好で胎土は c。

88 ～ 96 はくの字口縁の甕である。88 は丁寧なヨコナデによって整形している。焼成は良好で胎土は b。復元口径 14.0cm。89 は頸部を意識したつくりである。外面は縦方向のナデ調整，内面はヘラ削りによって仕上げる。焼成は良好で胎土は b。復元口径 15.4cm。90 は 88 と同様な形態の甕で，外面は縦方向の刷毛目調整後ナデ，内面はナデ調整で仕上げる。焼成は良好で，胎土は b。復元口径 18.2cm。91 は外反する口縁部で，外面はナデ調整，内面はヘラ削りで仕上げる。焼成は良好，胎土は c。復元口径 15.4cm。92 の口縁部は短くやや外反する。外面は不明瞭であるが，内面は刷毛目調整後ナデ調整で仕上げる。焼成は良好で，胎土は c。復元口径 15.5cm。93 はナデ調整によって口縁部を整形している。外面はナデ調整で，内面は明瞭ではないがヘラ削りと考えられる。焼成は良好で胎土は e。復元口径は 14.0cm。94 は薄く引き伸ばした口縁部を外反させる。外面は横方向の刷毛目調整後ナデ調整，内面はヘラ削りである。焼成は良好で胎土は a。復元口径 13.9cm。95・96 は直立気味に外反する口縁部をもつもので，96 はシャープなつくりである。いずれも外面は粗い叩き成形で，内面は 95 がヘラ削り，96 が横方向の刷毛目調整による。焼成は良好で，胎土はいずれも c と考えられる。復元口径は順に 12.6cm，16.2cm。

97 は有孔鉢である。焼成前穿孔で，３回の穿孔行為によっている。外面は叩きによると思われる平坦面がいくつも確認できる。内外面ともに板状工具によるナデで仕上げる。焼成は良好で外底面に黒斑が明瞭に残る。胎土は a。口径 18.0cm，器高 16.8cm，底径 1.7cm。

98 は高杯である。杯部口縁はヨコナデによって整形し，外面は分割磨きで仕上げる。脚部は外面を縦方向の刷毛目調整後磨きによって仕上げ，内面はヨコ方向の削りを施す。脚部には円形の透かしをちどりに 6 か所施す。焼成は良好で胎土は b。杯部径は 15.1cm，器高 12.9cm，脚部径 19.0cm。

99 は鈍く折れ曲げた鉢の口縁部片である。粘土帯の接合痕跡が残る。外面は叩き整形後ナデ，内面は口縁と体部を刷毛目調整によって仕上げる。焼成は良好で胎土は b。100 は脚部片で，鉢と考えられる。脚部は粘土をつまみ出すことで整形しており，指押さえが内外面に顕著に認められる。非常に粗雑なつくりである。焼成は良好で胎土は c と考えられる。脚部径は 7.2cm。101 は底部片もしくは脚部片と考えられる。器面剥落で詳細は不明。焼成は不良で胎土は c。底径 4.4cm。102 ～ 103 は小型の鉢。102 は内外面ともに丁寧なナデ調整で仕上げ，底部を削りによって丸底化する。焼成は良好で底部外面に黒斑が明瞭に残る。胎土は b'。復元口径 14.7cm，器高 5.6cm，底部径 3.9cm。103 は口唇部を平坦にするもので，底部を削りによって丸底化する。外面は粗いナデ調整，内面はヘラ磨きによって仕上げる。焼成はやや不良で，胎土は a。復元口径 21.9cm。

104 は直口壺で，器面剥落のため外面は不明であるが内面はナデ調整によって仕上げる。焼成は良好で胎土は c。復元口径 15.0cm。105 は広口壺もしくは長頸壺の口縁部片と考えられる。口縁部内面に波状文，口唇部に刺突文を施す。焼成は良好で胎土は b。復元口径 22.8cm。106 はくの字口縁の甕である。口縁部は外反する。外面は粗いナデ調整で，内面はヘラ削りで仕上げる。焼成は良好で，胎土は a と考えられる。復元口径 13.0cm。107 は内湾しながら直立するくの字口縁の甕もしくは壺である。頸部の内外面には口縁部の成形痕跡が残り，内面はヘラ削りで仕上げる。焼成は良好で胎土は b。復元口径 15.8cm。

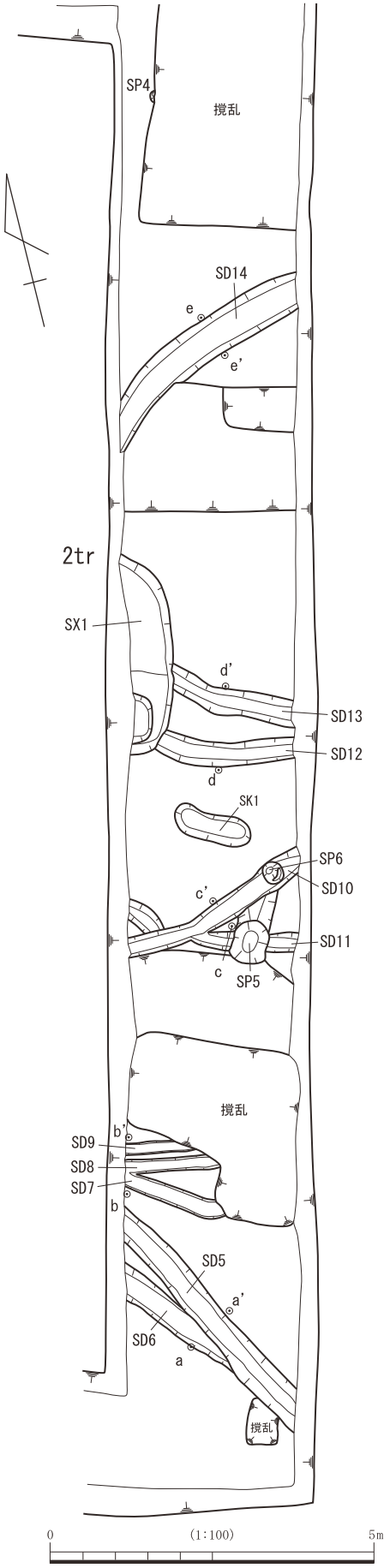
108 は口縁部をやや外反させる鉢で，内外面ともにナデ調整で，口縁部内面は刷毛目調整を施す。焼成は良好で内外面ともに黒斑が明瞭に残る。胎土は e。復元口径は 14.0cm。109 は小型の鉢である。外面は指押さえ，内面は横方向の板状工具によるナデ調整で仕上げる。焼成は良好で，黒斑が残る。胎土は e と考えられる。復元口径 12.8cm，器高 5.45cm，底径 3.2cm。

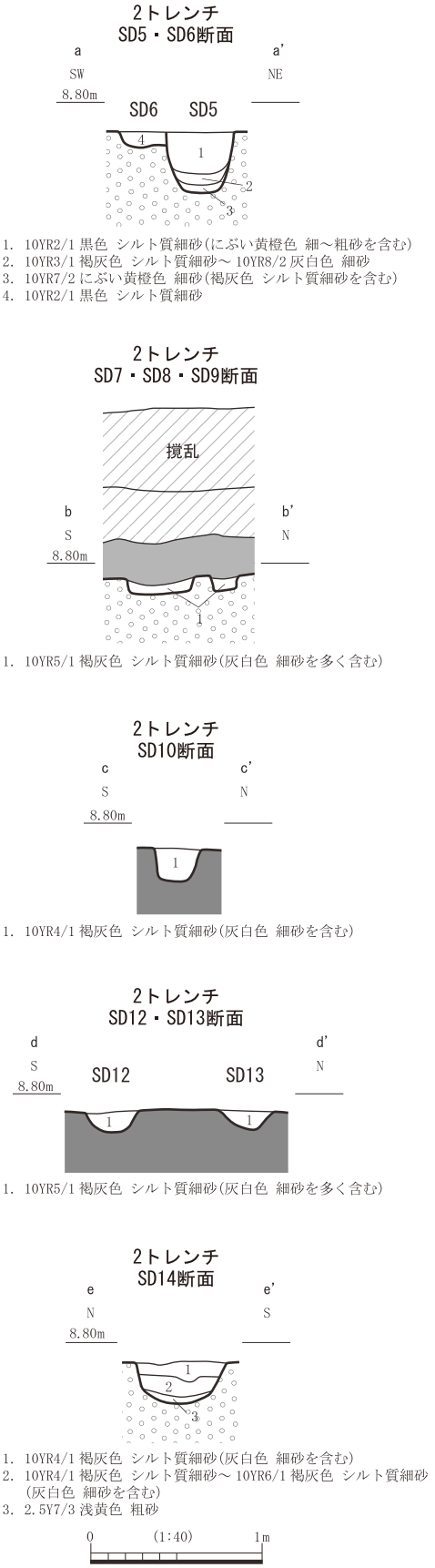
110 は大型器台の受け部である。受け部外面には鋸歯文を施す。焼成は良好で胎土は b。受け部 29.6cm。

111 は製塩土器の脚台である。器面剥落のため詳細は不明。焼成は良好で胎土は b。脚台径 3.6cm。112 は須恵器の鉢の口縁部である。体部がハの字に開き，さらに口縁部屈曲してハの字に開く。内外面ともにナデ調整で仕上げる。焼成はやや軟質で，胎土は精良で細かな石英，長石を含み，灰白色を呈する。復元口径 24.2cm。

SD4

1 トレンチ南側に位置する南北方向の溝で，掘り形は調査区の外側に続く。SD4 の 0.50 m西側には，同じ方





第 15 図　溝平・断面図①（S= 1 /100・1/40）

向に掘削されたSD1が位置する。また，掘り形の一部を後世の撹乱によって破壊される。SD4の検出長は約7.50 m，幅は約0.40 m，検出面からの深さは約0.10 mである。埋土は黒褐色シルト質細砂の単層である。SD4からは弥生土器小片が出土した。

SD5

2トレンチ南側で検出した南東から北西方向に掘削された溝である。SD5はSD6と重複関係にあり，断面の観察からSD6が埋没したのちにSD5が開削されたことを確認した。SD5の検出長は約4.50 m，幅は0.40～0.50 m，検出面からの深さは約0.34 mである。埋土は3層に大別できるものの，いずれも類似した土層である。また，層相から，明確に流水があった痕跡は認められなかった。SD5からは，弥生土器片が出土した。

SD6

2トレンチ南側に位置し，SD5に大部分を破壊される溝である。SD6の検出長は約2.00 m，幅は約0.20 m，検出面からの深さは約0.10 mである。埋土は黒色シルト質細砂の単層であるが，層相の観察から明確に流水があった痕跡は認められなかった。SD6からは，弥生土器片が出土した。

SD7

2トレンチ南側で検出した溝で，SD8・9に隣接する。SD7の東側は，後世の撹乱によって破壊される。SD7はSD8と重複関係にあり，断面観察の結果，双方は同時に埋没したことが判明した。このことから，埋没する直前の段階では，双方の溝が同時に存在したことが分かる。SD7の検出長は約1.70 m，幅は約0.30 m，検出面からの深さは約0.08 mである。埋土は褐灰色シルト質細砂の単層で，層相の観察から明確に流水の痕跡は認められなかった。

SD8

2トレンチ南側に位置し，SD7に隣接する溝である。SD7と同様にSD8も東側の一部を後世の撹乱によって破壊される。SD8の検出長は約1.50 m，幅は約0.20 m，検出面からの深さは約0.08 mである。SD8はSD7と同一の土層で埋没しており，層相から明確に流水の痕跡は認められなかった。

SD9

2トレンチ南側に位置し，SD8の0.10 m北側で検出した溝である。SD9は大部分が後世の撹乱によって破壊されるため，検出長は約0.80 mと限られた範囲である。SD9の幅は約0.16 m，検出面からの深さは約0.08 mで，埋土はSD7・8と類似する褐灰色シルト質細砂の単層である。SD7・8の所見と同様に，層相の観察から明確に流水の痕跡は認められなかった。

SD10

2トレンチ中央やや南側で検出した溝で，SD11・SP6と重複関係を有する。平面と断面で確認した結果，3者のなかでSD10が最も新しい遺構と判断した。SD10の検出長は約3.00 m，幅は約0.30 m，検出面からの深さは約0.20 mである。埋土は褐灰色シルト質細砂の単層で，層相の観察からSD10には流水があった可能性が考えられる。SD10からは，弥生土器片が出土した。

【出土遺物】

113は大型鉢の口縁部片である。内外面ともに明瞭なヨコナデ整形。焼成は良好で胎土はb。114は小さく外反する口縁部をもつ鉢である。外面は磨滅が著しく，内面は整形時の指押さえが残る。焼成はやや不良で，胎土はb。

SD11

2トレンチ南側に位置し，掘り形の一部をSD10によって破壊される。また，そのほかにもSP5と重複関係があり，SP5が埋没したのちにSD11が開削されたことを確認した。SD11の検出長は約2.50 m，幅は約0.30 mである。SD11からは，弥生土器片が出土した。

SD12

2トレンチ中央付近で検出し，0.50 m北側にはSD13が位置する。SD12はSX1と重複関係が認められ，平面における観察でSD12が埋没したのちにSX1が掘削されたことを確認した。SD12の検出長は約2.00 m，幅は約0.30 m，検出面からの深さは約0.10 mである。埋土はSD13と類似し，褐灰色シルト質細砂の単層である。SD12からは，弥生土器片が出土した。

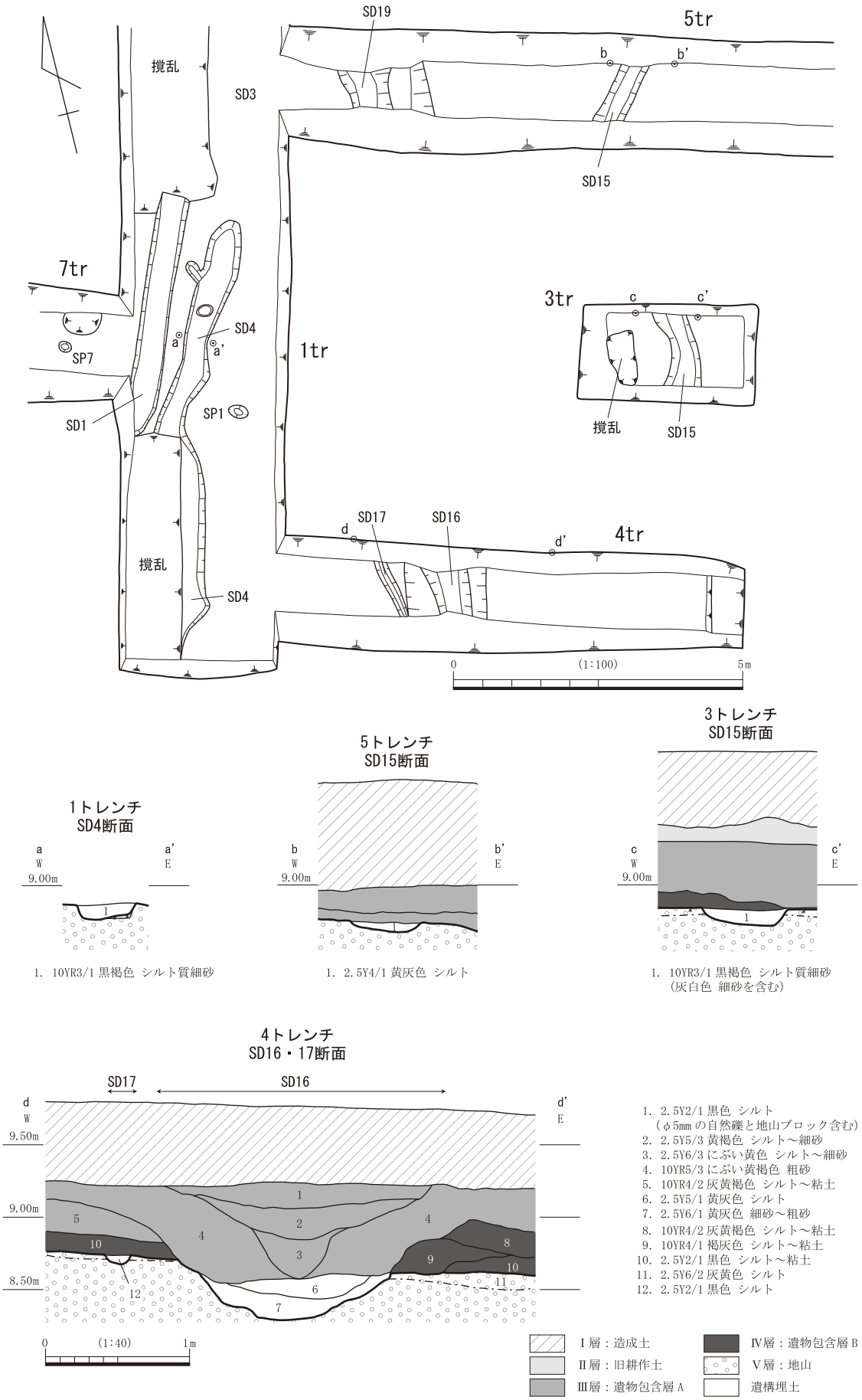
SD13

2トレンチ中央付近に位置し，SD12とほぼ同一の方向に掘削された溝である。SD13の検出長は約2.00 m，幅は0.30 m，検出面からの深さは約0.12 mである。埋土はSD12と類似する。

SD14

2トレンチ北側で検出した溝で，遺構の一部分を後世の撹乱によって破壊される。SD14の西側はやや円弧を描きながら南側へ緩やかに屈曲する。SD14の検出長は約3.50 m，幅は約0.50 m，検出面からの深さは約0.24 mである。埋土は3層に細別できるが，いずれも砂系の土層が堆積する。SD14からは，弥生土器片が出土した。

SD15



第 16 図　溝平・断面図②（S= 1 /100・1/40）

3トレンチと5トレンチで検出した溝である。双方のトレンチで別々に検出したが，埋土が類似することから同一の溝と判断した。SD15の検出長は約5.50 m，幅は0.50～0.60 m，検出面からの深さは0.06～0.10 mである。2箇所の断面で溝の底部の標高を比較すると，南側に位置する3トレンチでは標高約8.72 m，北側の5トレンチでは標高約8.68 mであることから，溝の底部は北側に向けて低くなることが分かる。埋土はシルトの単層で，層相の観察から明確に流水の痕跡は認められなかった。

SD16

4トレンチで検出した南北方向に掘削された溝である。SD16は，5トレンチのSD19と埋土が類似することと掘削位置がSD16の北側延長部分に位置することから，同一の溝の可能性が考えられたが，調査で断定することはできなかった。また，SD16はSD17と重複関係があり，平面での観察から，SD17を破壊してSD16が掘削されたことが判明した。SD16の検出長は約0.70 m，幅は約1.10 m，Ⅴ層上面からの深さは最深部で約0.30 mである。断面観察の結果，SD16は一定の埋没が進行したのち浅い窪地となり，その窪地を基本層序のⅢ層が被覆していた。このため，SD16の純粋な埋土は第16図SD16断面の6・7層と考えられる。SD16の上層（断面図6層）はシルト質，下層（断面図7層）は粗砂であることから，溝内にはいくらかの流水があったものと考えられる。

SD16からは遺物が出土しており，とくに下層（断面図7層）から多数の遺物が出土した。

【出土遺物】

115～120はくの字口縁の甕で，いずれも外反するタイプのものである。115は口径が小さく，頸部がややしまるので壺形土器の形態に類似する。内外面ともにナデ調整で仕上げる。焼成は良好で胎土はa'。復元口径13.2cm。116は縦方向の刷毛目調整後，ナデ調整によって仕上げる。内面は粗いケズリである。焼成は良好で胎土はa'。復元口径は15.6cm。117は外面全体を粗い叩きによって成形し，その後口縁部を折り曲げて成形する。内面は摩耗しており不明である。焼成はやや不良で胎土はc。復元口径17.5cm。118・119はやや分厚いつくりで，如意形の口縁部形態を呈し，端部は平坦か丸く収める。いずれも外面は縦方向の刷毛目調整を施し，内面はケズリである。いずれも焼成は良好で，胎土はe。復元口径は順に15.4cm，15.0cm。120は口唇部が肥厚するもので，内面は横方向の刷毛目調整で仕上げる。中世の土師質土器鍋の可能性もある。焼成はやや不良で胎土はaと考えられる。

121は有孔鉢で，内外面ともに板状工具によるナデ調整で仕上げる。焼成前穿孔で，外側から穿孔した後，穿孔周辺に丁寧にナデ調整を施す。焼成は良好で底部周辺に黒斑が残る。胎土はa。

122は小型の鉢である。口縁部は直線的に開く。外面は叩き成形後，ナデ調整によって平滑に仕上げる。内面は縦方向の板状工具によるナデ調整で仕上げる。焼成は良好で外面に黒斑が残る。胎土はaと考えられるが，雲母が少ない。口径8.9cm，器高5.6cm，底径3.6cm。123も小型の鉢であるが，口縁部が内湾する。内外面ともに丁寧なナデ調整で仕上げる。指押さえが一部認められる。焼成は良好で胎土はaと考えられる。復元口径9.6cm，器高6.3cm，底径3.3cm。

SD17

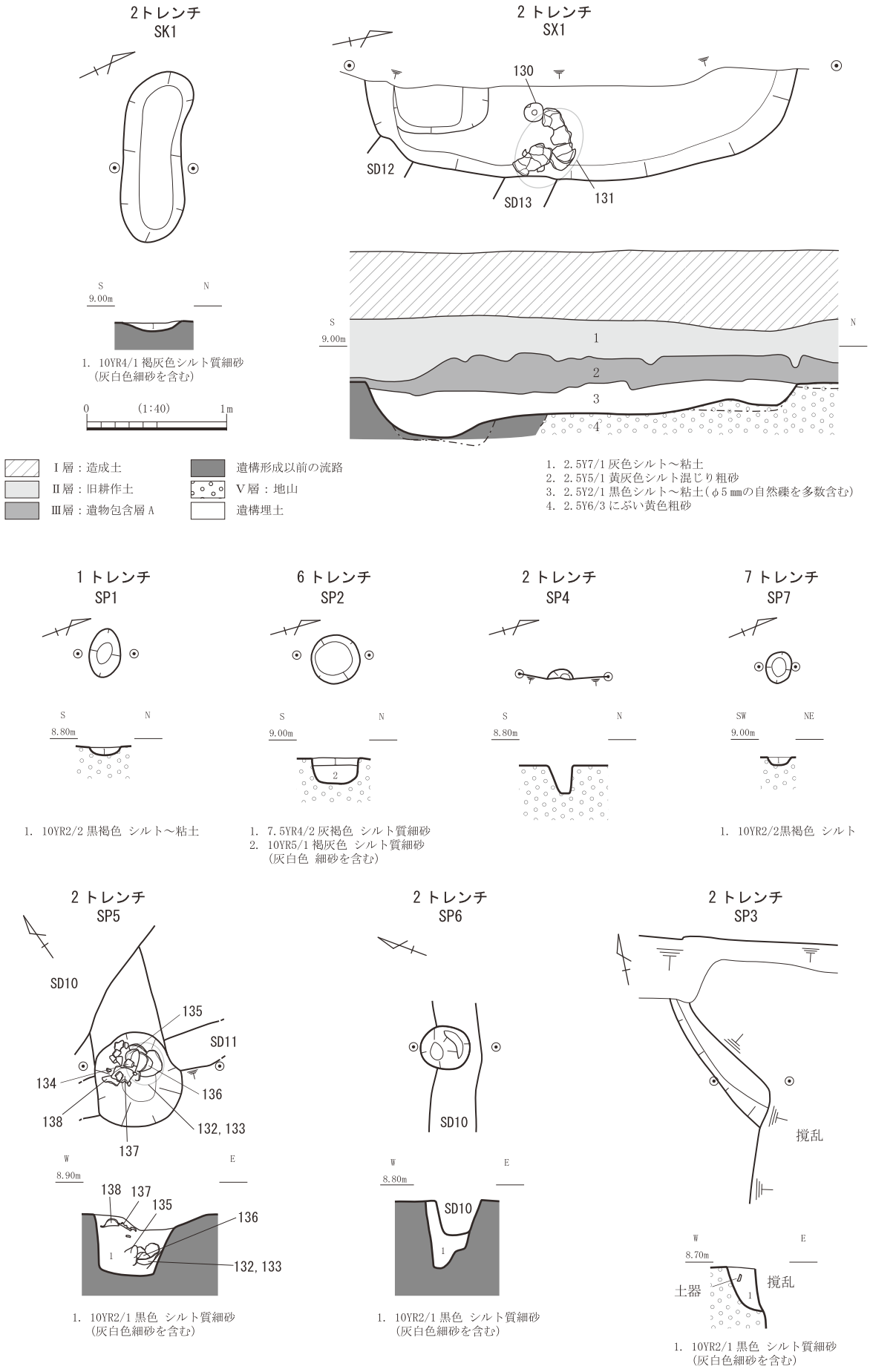
4トレンチで検出した溝で，前述したとおり後世に開削されたSD16に掘り形の一部を破壊される。SD17の検出長は約1.10 m，幅は約0.15 m，検出面からの深さは約0.05 mである。埋土は黒色シルトの単層であり，層相からは明確に流水があった痕跡は認められなかった。

SD19

5トレンチ西側で検出した溝で，4トレンチのSD16と同一の溝になる可能性があるが，断定することはできなかった。SD19は，溝の形成以前に埋没しているNR1をベースとして掘削される。SD19の検出長は約1.00 m，幅は約1.50 m，検出面からの深さは約0.30 mである。埋土はシルト～細砂であり，SD16と同様に溝内には流水があったものと考えられる。SD19からは，弥生土器片が出土した。

【出土遺物】

124～125は，くの字口縁の甕である。124は頸部を意識した形態である。焼成は良好で，胎土はb'。復元口径は11.5cm。125は口縁部を短く外に折り曲げたような形状で本遺跡では珍しい形態である。頸部周辺には折れ曲げ時の押圧の跡が認められる。内面は横方向のケズリである。焼成は良好で胎土はb'。復元口径16.0cm。126は中型の鉢である。内湾する口縁で端部はやや肥厚させる。丸みを帯びた形態で，プロポーションは珍しい。外面は整形時の指押さえ，刷毛目調整が認められる。内面はナデ調整によって平滑に仕上げる。焼成は良好で胎土はa。復元口径は17.6cm。127はくの字口縁の大型の鉢である。外面は粗い叩き調整で成形後，口縁部を



第 17 図　土坑・性格不明遺構・ピット平・断面図（S=1/40）

ナデ調整によって，くの字に曲げる。内面は粗い刷毛目調整で，粘土帯接合箇所と考えられる付近に指押さえが認められる。焼成は不良で，胎土は a。

SD20

9 トレンチで検出した溝である。SD20 の検出長は約 1.80 m，幅は約 0.50 m，検出面からの深さは約 0.15 mである。

SK1

2 トレンチで検出した溝状を呈する土坑である。SK1 の長さは約 1.20 m，幅は約 0.42 m，検出面からの深さは約 0.06 mである。埋土は褐灰色シルト質細砂の単層である。

SX1

2 トレンチで検出した隅がやや丸みを持つ遺構である。調査区の西側に掘り形が続くため，遺構全体の形状は不明である。また，遺構のすべてを調査できなかったため，遺構の性格を特定することはできなかった。

SX1 は SD12・13 と重複関係にあり，平面での観察から SD12・13 が埋没したのちに SX1 が掘削されたことを確認した。SX1 の南北長は約 3.10 m，東西長は 0.70 m以上，検出面からの深さは最深部で約 0.30 mである。SX1 の底部は，南側の一部分がやや窪むなど若干の凹凸が認められる。SX1 の東肩付近の埋土最上部で，遺存状態の良い弥生土器などが数個体出土した。

【出土遺物】

128 はくの字口縁の甕である。外面は粗い叩き成形後に縦方向の刷毛目調整で仕上げる。内面は口縁部を横方向の刷毛目調整，体部を刷毛目調整後にナデ調整で仕上げる。焼成は良好で胎土は a と考えられる。復元口径 12.8cm。

129 は小型の鉢で，口縁部は丸みを帯びた形状で，口唇部をやや外反させる。外面は剥落のため不明であるが，内面はナデ調整によって仕上げる。焼成は良好で胎土は b'。復元口径 13.8cm。130 は小型の鉢で，直線状に開く口縁部である。内外面ともに剥落しており詳細はやや不明であるが，整形後，内外面ともに刷毛目調整で仕上げる。焼成はやや不良で，胎土は a。口径 13.05cm，器高 6.5cm，底径 3.7cm。131 は壺の体部と考えられるもので，やや不安定な底部で，底径は 5.3cm である。外面は叩き成形後，ナデ調整等を施したと考えられる。焼成は良好で，胎土は d である。

SP1

1 トレンチで検出した楕円形を呈するピットである。SP1 の長軸は約 0.34 m，短軸約 0.22 m，検出面からの深さは約 0.06 mである。埋土は黒褐色シルト～粘土の単層である。

SP2

6 トレンチ西側で検出した円形を呈するピットである。SP2 の直径は約 0.34 m，検出面からの深さは約 0.18 mで，埋土は 2 層に細分できる。上層は灰褐色シルト質細砂，下層には褐灰色シルト質細砂が堆積する。

SP3

2 トレンチ北側で検出した遺構である。大部分を後世の撹乱によって破壊されるため，全体の形状は不明だが，遺構の規模から土坑の可能性も考えられる。SP3 の南北長は 1.10 m以上，東西長は 0.26 m以上，検出面からの深さは約 0.30 mである。埋土は黒色シルト質細砂の単層である。

SP4

2 トレンチ北側で検出したピットで，遺構の大部分を後世の撹乱によって破壊されるが，遺存する箇所の観察から，平面形は円形を呈するものと考えられる。SP4 の直径は約 0.20 m，検出面からの深さは約 0.20 mである。

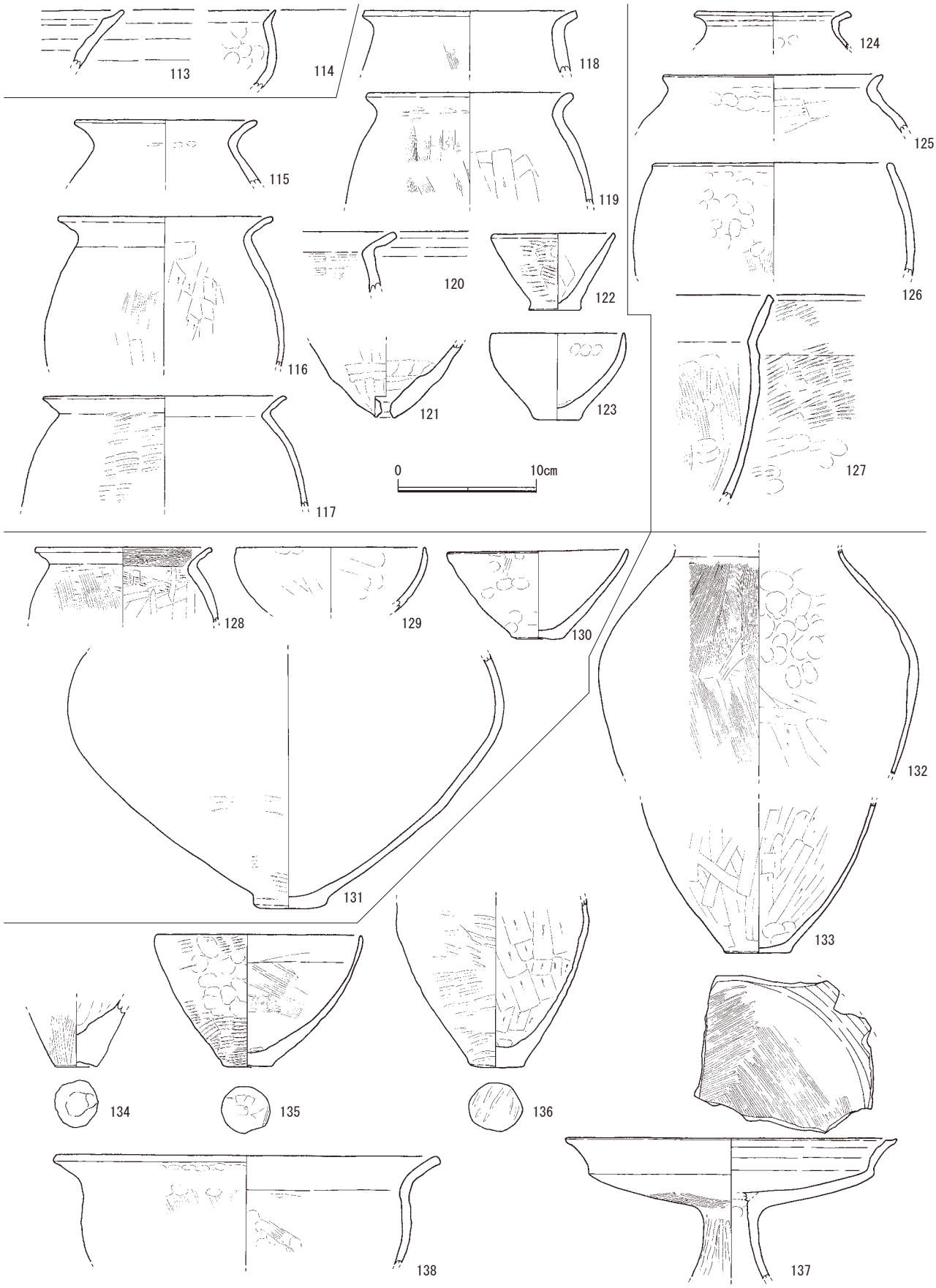
SP5

2 トレンチ中央やや南側で検出したピットで，SD11 と重複関係が認められる。遺構の前後関係は，SD11 を掘削したのちに SP5 を検出したことから，SP5 が SD11 に先行するものと考えられる。SP5 の平面形はほぼ円形で，長軸約 0.68 m，短軸約 0.60 m，検出面からの深さは約 0.40 mである。埋土は黒色シルト質砂の単層である。

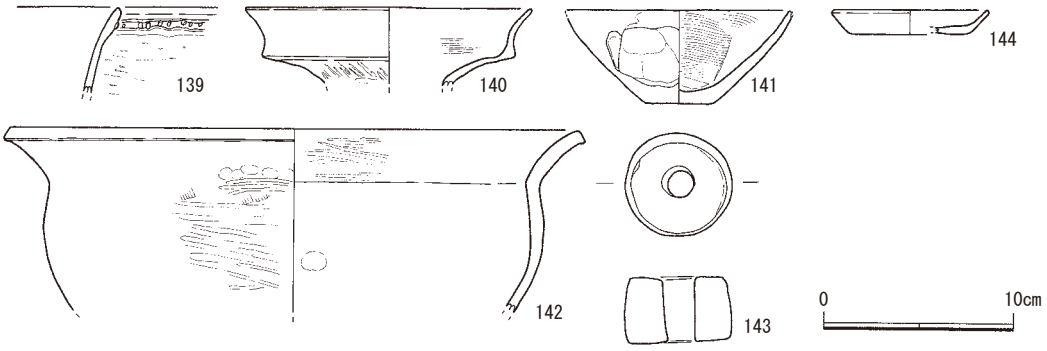
遺物は，SP5 の検出面付近と底部付近の 2 箇所から，遺存状況の良い弥生土器が複数出土した。

【出土遺物】

132・133 は甕の体部・底部片である。同一個体の可能性もあるが，接合はしない。132 の外面は細かな縦方向の刷毛目調整で，内面は下半が削りで肩部付近は指押さえによって整形している。焼成は良好で胎土は b'。133 の外面は叩き整形後，磨き調整に近い幅の狭い工具によるナデ調整で仕上げ，内面は縦方向のケズリを施す。焼成は良好で胎土は b。底径は 4.7cm。134 は底部片で，非常に分厚く，上げ底である。外面は非常に粗い刷毛目調整で仕上げ，内面は板状工具によるナデ調整である。焼成は良好で胎土は c。底径は 3.0cm。136 は甕の底部から体部である。外面は太目の叩き工具による成形後，ナデ調整によって仕上げる。底部外面にも叩きを施す。内面は縦方向のケズリによって仕上げる。焼成は良好で胎土は c。底径は 3.9cm。137 は高杯である。口



第 18 図　SD10・16, SX1, SP5 出土遺物（S=1/4）



第 19 図　その他の遺物 (S=1/4)

縁部はヨコナデ調整によって外反させ，杯部の内外面を細かな分割磨きで仕上げる。焼成はやや不良で胎土は b であるが角閃石が少ない。復元口径 24.0cm。135 は鉢である。口縁端部がやや内湾する。外面はらせん状に叩き成形を行い，一部を指押さえなどで整形する。内面は刷毛目調整後板状工具によってナデ仕上げる。焼成は不良で胎土は変色が著しく判断が困難である。復元口径 15.1cm，器高 9.5cm，底径 3.65cm。脚部は縦方向の磨き調整で仕上げる。138 はくの字の大型鉢である。口縁部は緩やかに外反する。外面は刷毛目調整後，口縁部をヨコナデおよび指押さえによって整形する。内面は刷毛目調整後，指押さえを行う。焼成はやや不良で黒斑が口縁部外面に残る。胎土は a。復元口径 28.0cm。

SP6

2 トレンチ中央やや南側で検出したピットで，SD10 と重複関係が認められる。遺構の前後関係は，SP6 の埋土を切り込んで SD10 が掘削されており，SP6 が SD10 に先行する遺構と考えられる。SP6 の平面形はやや楕円形を呈し，長軸約 0.36 m，短軸約 0.30 m，検出面からの深さは最深部で約 0.48 mである。埋土は黒色シルト質細砂の単層である。

SP7

7 トレンチで検出した楕円形を呈するピットである。SP7 の長軸は約 0.24 m，短軸は約 0.18 m，検出面からの深さは約 0.06 mである。埋土は黒褐色シルトの単層である。

包含層など出土遺物

139 ～ 143 は機械掘削時などに採集された遺物である。139 は縄文時代晩期の深鉢の口縁部片で，外面は削り調整で仕上げ，口唇部からやや下がったところに刻目突帯を張り付ける。内面は磨滅している。焼成は良好で胎土は褐色を呈し，石英・長石を多量に含み，わずかに雲母を含む。140 は二重口縁壺と考えられる。在地のものでは類例がなく，搬入品と考えられる。高杯の脚部裾部の可能性もある。内外面ともに丁寧な磨き調整によって仕上げる。焼成は良好で，胎土は e。復元口径は 15.0cm。141 は小型の鉢で，外面はナデ調整で内面は刷毛目調整で仕上げる。外面には焼成剥離痕跡が認められる。底部には赤色顔料のような付着物が認められる。焼成は良好で底部付近に黒斑が残る。胎土は a。復元口径 12.0cm，器高 4.9cm，底径 3.6cm。142 はくの字口縁の大型鉢で，内外面ともに磨き調整で仕上げる。焼成は良好で胎土は a。復元口径は 30.8cm。143 は土製品で，土錘と考えられる。表面は丁寧な仕上げである。焼成は良好で胎土は b'。幅 5.65cm，厚み 3.5cm。144 は土師質土器の小皿である。底部はヘラ切りである。焼成は良好で胎土は淡明橙色で石英・長石を含む。復元口径 8.3cm，器高 1.3cm，底径 6.0cm。

第４章　まとめ

当遺跡の調査について，簡潔にまとめ，今後の佐料遺跡の調査に役立てたい。

第１節　遺構

既述のとおり，遺構の切り合いから大きく２時期に区分することができる。ただし，出土遺物では大きな差異はなく，おおむね後期後葉の短期間に形成され廃絶された集落で，高松平野における他の集落と同様な傾向を示す。特に高松平野においては後期には継続する集落と短命ではあるが，継続する集落の周辺に小規模な集落が増大することが明らかで，それらの現象とも呼応する可能性が想定される。

今回の調査は非常に限られた範囲での調査であったため，集落域の構成については判然としないが，推定も含め，整理しておく。

遺構の東側，南側が低く傾斜していく場所に立地しており，西側に当たる山側に南北方向の溝を設けている。２トレンチで確認できた遺構群は住居址などの居住施設を構成する可能性が想定され，ある一定の範囲を占拠する居住集団の存在を想定することができる。

これらの見立てに基づけば，集落域は東側の低地に向かって展開しており，高所に排水および空間を区画する施設が設けられていることがわかる。また，この溝に廃棄された土器群からも，集落域の境界などを示唆しているかもしれない。既述のとおり，集落が築かれた前後のみならず，後世においても堆積作用が顕著な地域であったようで，居住環境としてはあまり適当な場所ではなかったようである。

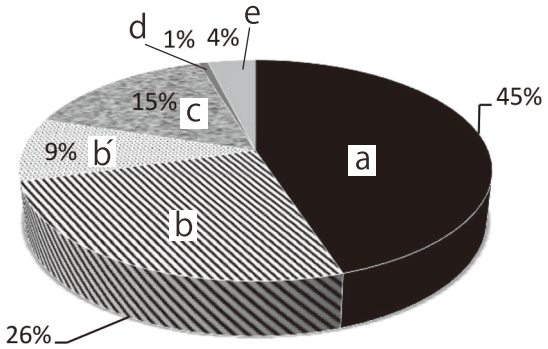
第２節　出土遺物について

今回の調査で出土した土器群は一括性を保証できるものは少なく，その意味で分析資料としては不適切ではあるが，おおむね後期中葉から後葉にかけての器種がそろっており，傾向を把握する上では十分意味のあるものと考え，胎土について検討を行ってみたい。

胎土分類に基づき，報告遺物をカウントしたものが第４表で，そして，比率を示したものが第 20 図である。これによれば，胎土ａ類がおおむね半数を占め，胎土ｂが約四分の一を占めている。また，それ以外にも少数派も存在し，いくつかのヴァリエーションが認められることは明らかである。以上の比率から，胎土ａが主体であると考えられ，佐料遺跡周辺において土器製作に用いられた胎土と考えられる。ただし，この胎土ａとしたものは淡茶褐色～黄褐色を呈し，長石・石英・赤褐色砂粒に加え，非常に微細な雲母（光沢のある砂粒で非常に細かな雲母と考えられる砂粒を含むもの）を含むものであるが，雲母の量にはヴァリエーションが認められ，さらに細分すべきかもしれない。しかし，色調，胎土の質感などは比較的良く似ており，幅をもつグループとしてまとめておき，より正確な分類については今後の検討課題としておきたい。また，土器製作を考える上で第 19 図-141 が焼成破裂痕跡の残る土器であり，注目されるが，一点であること，胎土ａ' と判断したものの，いわゆる典型的な胎土ａではないことからこの判断についてもやや不安の残るものである。

第４表　出土土器胎土分類別個体数

	SD2	NR1	SD1	SD10	SD16	SD19	SX1	SP5	その他	総数
胎土a	14	1	30		6	2	2	1	2	58
胎土b	8		19	2			1	3		33
胎土b'	2	1	6			2			1	12
胎土c	4		13		1			2		20
胎土d							1			1
胎土e			3		2					5
										129



第 20 図　出土土器胎土分類別比率

以上の点から胎土ａ類をこの地域の主要な胎土と考えているものの，資料が不足していることも現実であり，当遺跡周辺の土器製作に用いられた主要な素地（粘土）と判断するにはやや躊躇があり，今後のデータの蓄積を待って検討していきたい。

一方，香東川下流域産土器である胎土ｂの占める割合は高松平野東部の小山南谷遺跡，高松平野西部の中間西井坪遺跡と同様な傾向を示し（大久保 2003），当遺跡が立地する高松平野北西部においても縁辺部としての位置付けができるようである。ただし，今回の出土資料には，現在考えられている香東川下流域産土器群を構成する器種にはないものも含まれている。また，その胎土ｂと同様な見た目のものではあるが，角閃石が少なく，雲母を多量に含む胎土ｂ' も一定程度存在している。以上の点からも，後期後葉においてより単純化していくと

考えられている香東川下流域産土器群の実態は現在考えているよりも複雑である可能性があり，今後の周辺での資料の蓄積が注目されるとともに，いまだに資料が蓄積されていない同時期の生産地域の集落資料の蓄積が待たれる。

しかし，いずれにしても，これまで大久保徹也氏（2003など）によって提示されているように，主体を占める胎土の土器以外にも一定量の産地の異なるであろう土器群が存在することは紛れもない事実である。短期間の集落における多様な土器調達のあり方を知ることができる重要な事例であり，これまで高松平野の土器研究をリードしてきた香東川下流域産土器の生産と流通の研究に加え，高松平野内部の各地域の生産状況について検討（乗松 2007，渡邊 2013）を進めていくことでより弥生社会の実像に迫ることができるであろう。

以上のように非常に限定された調査ではあったものの，高松平野の弥生時代を考えていく上で足がかりとなるような資料を得ることができた。今後の調査の蓄積を待ちたい。

【主要参考文献】

大久保徹也 2003「高松平野香東川下流域産土器の生産と流通」『初期古墳と大和の考古学』学生社

乗松真也 2007「交易された土器」『比較文化研究所年報』第 23 号　徳島文理大学

渡邊誠 2013「高松平野における弥生時代後期前半の土器相」『私の考古学　丹羽佑一先生退任記念論文集』丹羽佑一先生退任記念事業会

写　真　図　版

1　2トレンチ全景（北から）

2　5トレンチ全景（東から）

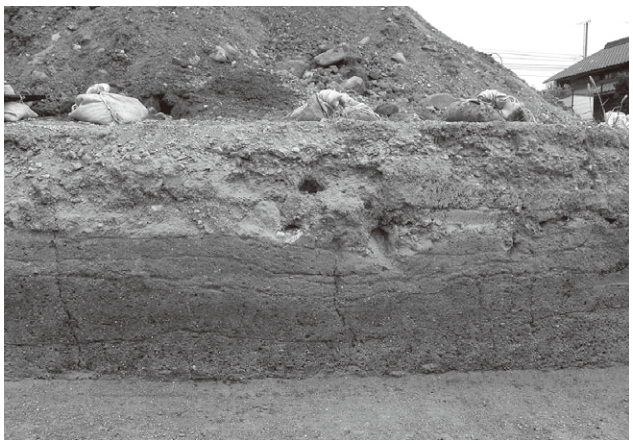
3　6トレンチ全景（西から）

4　7トレンチ全景（東から）

1　9トレンチ全景（北から）

2　10トレンチ全景（北から）

3　基本土層A断面（西から）



4　基本土層B断面（西から）

5　基本土層C断面（西から）

1　SD2 検出全景（北から）

2　SD2 断面①（東から）

3　SD2 断面②（南から）

4　NR1　1 トレンチ断ち割り断面 (西から）

5　NR1　10 トレンチ断面（北から）

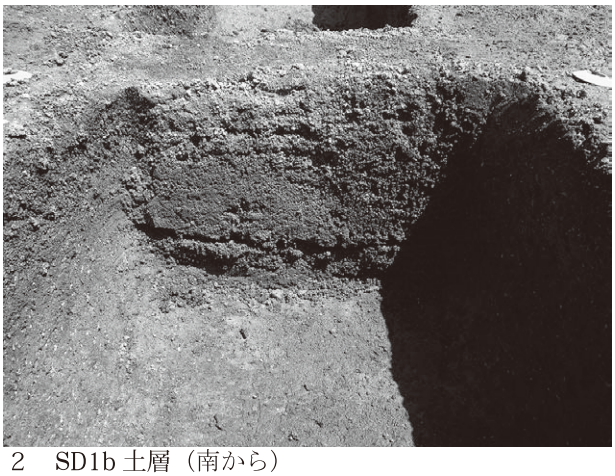
6　SD1 全景（北から）

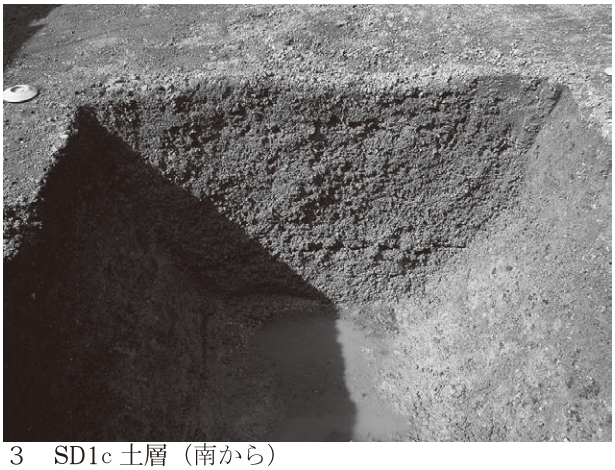
1　SD1 上層土器出土状況（東から）

2　SD1 上層土器出土状況（南から）

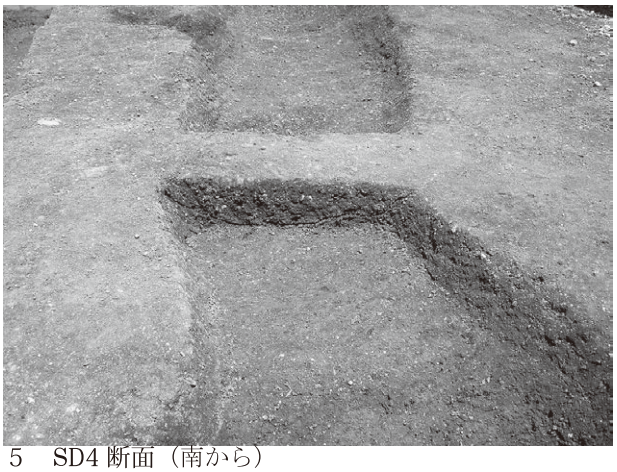
3　SD1 上層土器出土状況（南から）

1　SD1a 土層（南から）

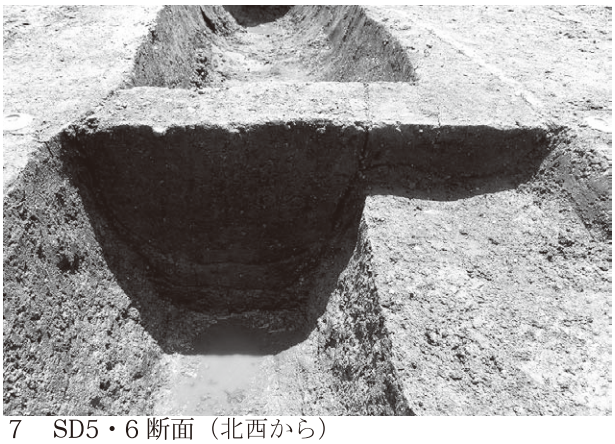

2　SD1b 土層（南から）


3　SD1c 土層（南から）

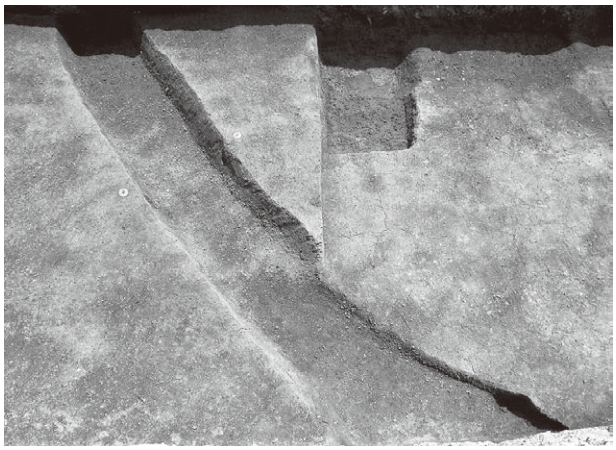
4　SD4 全景（南から）


5　SD4 断面（南から）

6　2トレンチ南半溝全景（南から）


7　SD5・6 断面（北西から）

8　SD7 ～ 9 断面（東から）


1　SD14 全景（西から）

2　SD14 断面（北東から）

3　SD15 全景（3トレンチ：南から）

4　SD15 断面（5トレンチ：南から）

5　SD16 全景（西から）

6　SD16 断面（南から）

7　SD19 断面（南東から）

1　SX1 土器出土状況（南から）

2　SX1 土器出土状況（南から）

3　SX1 完掘状況（南東から）

1　SP5 全景（西から）

2　SP5 土器出土状況（南から）

3　SP5 土器出土状況（南から）

報　告　書　抄　録

ふりがな	さんちょく「ふるーつのさと」しんちくこうじにともなうまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ　さりょういせき
書名	産直「フルーツの里」新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　佐料遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第155集
編著者名	波多野　篤・渡邊　誠
編集機関	高松市教育委員会
所在地	〒760－8571　香川県高松市番町一丁目8番15号　TEL087－839－2660
発行年月日	西暦2014年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	発掘期間	発掘面積	発掘原因
さりょういせき 佐料遺跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 きなしちょう 鬼無町 さりょう 佐料	37201		34° 20′ 0.7″	133° 59′ 44″	2013.4.22 ～ 2013.5.17	273㎡	産直「フルーツの里」新築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
佐料遺跡	集　落	縄文時代 弥生時代	土坑・溝 ピット 旧河道	弥生土器，土製品，石器，須恵器，土師器	

要　約	佐料遺跡は弥生時代後期後葉を中心とした集落跡である。今回の調査区では居住に伴う施設はほとんど確認できていなかったが，当該期の弥生土器が多量に確認でき，周辺に集落が展開していたことが明らかとなった。また，高松平野中央から東部の土器とは異なる特徴をもつことが明らかとなった。今後の資料の蓄積によるが，高松平野西部の弥生時代の社会を考える上で非常に貴重な資料と考えられる。

2014年３月31日　印刷
2014年３月31日　発行

高松市埋蔵文化財調査報告第155集
産直「フルーツの里」新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
佐料遺跡

発　行　者　高松市寿町一丁目３番６号
香川県農業協同組合
高松市番町一丁目８番15号
高松市教育委員会
印　刷　者　高松市朝日町五丁目14番２号
㈱　成光社